

浜松中納言物語を読む(後編)

— 卷四・卷五 —

6 卷四を読む

6・1 野山にまじる中納言 中納言は、吉野姫への興味やみがたく、吉野を訪れるのだった。

ことならば、松風のおとをもよのつねにたづねよみて、心のなぐさむかたもやと思ひよらましを、ただかくのみ野山にまじりつつ、心のしづまる世なく、あくがれまじふをも、…… (三二六頁)

中納言は、理想的な美女を求めてへ山に分け入っている。奥山から如意宝のような美女を掘り出して都へ持ち帰り、自分のものにしようとしているのだ。ところで、へ山から如意宝のような美女を発見した先例として、『竹取物語』の竹取の翁の存在が指摘できるだろう。

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹をとりつつ、よろづのことにつかひけり。

そして、翁は竹の中からかぐや姫を発見したのだった。へ野山にまじるという表現が、『浜松』と『竹取』に共通している。即ち、『浜松』における『竹取』の引用は、既にこの段階(巻四冒頭)から始まっていたのである。のちに、吉野姫がかぐや姫に喩えられる場面があるが(三七〇頁)、その伏線は巻四冒頭部分にも存在しているのだ。この段階から始発している竹取享受(『竹取物語』の話型の引用)が発露して、へ吉野姫かぐや姫という発想を固定してゆくのである。

では、中納言が竹取の翁に喩えられている理由は、何なのだろうか。翁は、かぐや姫の発見者であり、後見者でもあった。同様に、中納言は、吉野姫の発見者であり、後見者でもあるのだ。しかし、共通点はそれだけで

島内景二

はないようだ。万葉集の巻十六に収められている竹取翁歌群は、竹取伝説の古態をどめていると思われるのだが、ここでは竹取の翁は美女(若い娘)に対する求婚者の役割をも果たしている。詳しい考察は別稿に譲るしかないけれども、簡単な見通しを述べておくと、竹取の翁は、かぐや姫の発見者であると同時に求婚者でもあったと推測できるのだ。『源氏物語』の光源氏が、養女玉鬘に対して恋情を抱くのは、本来の『竹取』以前の竹取説話(話型を踏襲したものである)。そして、私達の主人公である『浜松』の中納言も、吉野姫の後見者(養育者)でありながら、彼女への恋情ゆえに苦しむことになってゆくのである。『浜松』における『竹取』享受の根には、深いものがあるようだ。

6・2 唐の相人の予言 中納言は、皇女を中納言に降嫁させようとする帝の御意思を翻すために、自分の寿命の短さを主張する。

もろこしにてかしこかりし相人どもの、廿四五六過さんことなん、いみじうかたげなり」とあまた言ひしをりに、(中略)いみじう物心ほそうおぼえ侍れば、三四年がほどは、おこなひより外のことなくて心みん。(三二七頁)

この時点での中納言の正確な年齢は不明だが、おそらく「二十四五六」から「三四五年」を引いた二十歳前後なのであろう。数年後に人生の激動(死と転生)を控えた貴公子として、主人公は造型されている。

この予言は、小さな文脈の中では、皇女降嫁をことわるための口実なのだが、大きな物語全体の文脈の中でも意味を持っている。この唐の相人の予言は、たぶん実現するだろうと思われる。中納言は、遠からぬ死と直面している。

ところで、〈死〉とは、一体何なのだろうか。〈死〉にも、さまざまのパターンがあるのである。最も理想的な死は、極楽往生である。この世の絆と執着を断ち切った人間だけが極楽へと転生することができる。今から数年間はひたすら仏道修行に励みたいという中納言の言葉は、極楽往生への決意と解することが可能である。死は、第二に、人間世界の中における転生（生まれ変わり）をもたらすことがある。人間としての情愛を断絶できなかった人物は、輪廻転生を繰り返すはめになってしまう。もう一度、人生がやり直されるのだ。『浜松』の登場人物達は、この二つのパターン（極楽往生と人間界への転生）の間を、苦しみつつ揺れ動いている。ここに、『浜松』の作者の死生観が垣間見えるようだ。死は、第三に動物界（畜生道）への転生であり、第四に墮地獄の可能性すらもあるのだが、『浜松』作者は、全くそのような可能性を考慮した形跡がない。ある意味では楽天的な死生観なのである。『源氏』は、そうではなかった。『源氏』の人物は、死後直ちに成仏できないことが多かった。生前に抱え込んでいた苦悩があまりにも大きすぎて、すぐさま極楽往生できなかったのである。中世の伝説だが、紫式部は狂言綺語の罪によって地獄に落ちたとされている。『源氏』の悲観的な死生観を踏まえた伝説なのだ。『浜松』と『源氏』との落差は、実に大きい。

中納言は、二十四五歳で死去してしまうだろう。しかし、彼は既に子供を複数残すことに成功している。彼が死んでも、家系は無事に存続するのである。安心して、彼は転生できる。しかし、〈壮年〉に達せずして死去する点に、中納言の人生の未熟さ（空虚さ）が指摘できるであろう。古代から存在している英雄説話の基本的話型は、未熟な青年が女性関係での失敗によって失脚し、異郷を旅することになる、やがて旅先で〈水の女〉と結ばれ彼の罪は清められ、立派な壮年となって都へ復帰してくる、彼は正式の結婚をし、壮大な邸宅を造営して自らの精神世界の充実ぶりを明らかにする、というようなものである。中納言は、日本で大姫（＝尼姫）と過ちをおかし、唐（異郷）へと旅立った。ここまでは、話型どおりである。しかし、彼は唐で、こともあろうに帝の妻（唐后）と密通し、罪を重ねていた

のである。日本に帰国後も、大貳の娘と道ならぬ関係を持ったのだ。中納言の人格は、旅をしたあとでも決して完成してはいない。『伊勢物語』の主人公（昔男）が、二条の后との密通ゆえに失脚し東に下ったものの、その関東でも人妻と密通していたという件りが連想される。

『浜松』の作者は、主人公の〈心の完成〉をさほど重視してはいないようだ。人格の完成者は、光源氏が六条院を造営したことで代表されるように、立派な家を作りそこに自分と関わった多くの女性達を集わせるものだ。しかし、『浜松』はそうではなかった。中納言は〈家〉を造築することもなく、〈正妻〉を据えることもなかった。『伊勢』の昔男が、河原院や渚院の主宰者でありえなかった点を想起させるものがある。

中納言が皇女降嫁を拒否する文脈の中に位置する唐の相人の予言は、『浜松』の地下水脈をほの見せるものでもあったのである。

6・3 勅使、中納言の尼姫への愛を察知する 中納言の言葉を聞いたのは、帝に近侍する「中将の内侍」であった。内侍は、中納言の尼姫への強い愛情を知った。

かぎりなく思ひ定め給ふなる海人の苦屋より外のことは、また心あらじとなむめりかし。
（三二八頁）

〈海人の苦屋〉は、〈尼〉の掛詞であり、尼姫のことを指している。なおかつ、ここには、尼姫が〈海人型〉の話型を引きずっていることも暗示されているであろう。海人型とは、女性（母親ないし妻）の自己犠牲性によって男性（子供ないし夫）が繁栄してゆくというパターンのことである（3・8参照のこと）。尼姫の出家の功德（一種の自己犠牲性）によって、彼女の子供（ちご姫君）は栄華を極めてゆくことになるだろう。『源氏物語』の明石の君が、自己抑制によって明石の姫君の幸福をもたらしたのと同じように、尼姫と対照的なのが、吉野尼君である。尼君は、自分の娘である吉野姫との契りを絶つことで、一人だけ往生しようとする。どちらが人間として立派かとか、どちらが本当の幸福なのかとかが問題なのではない。〈人間の論理〉と〈宗教の論理〉との違いなのである。

6・4 皇女降嫁、沙汰やみとなる 中将の内侍から中納言の意向を聞き

た帝は、皇女降嫁の件を中止することにした(三二九〜三三〇頁)。安易な解決と言われても仕方があるまい。そんなことで中止可能な程度にしか、帝は皇女の将来を心配していなかったのである。『源氏』の朱雀院は、光源氏に紫の上という最愛の女性(正妻に準ずる女性)がいると知っていないながら、女三の宮の降嫁を強行せずにはいられなかった。朱雀院は、それほどまでに我が子の行末を案じていたのである。

『浜松』の作者は、登場人物をぎりぎりのところまで追いつめる、ということをしていない。尼姫は、皇女に正妻の地位を奪われる苦しみから解放されたし、皇女の方も、夫に愛されない正妻の悲しみから永遠に自由でありえたのである。それは、主人公である中納言の苦悩を弱める作用をも果たしている。二人の女性の板ばさみになって苦しむことは、中納言の場合ありえない。唐にあつて唐后と契りながら日本の大姫(尼姫)を思い、日本にあつて尼姫と対面しながら唐后をしのぶ。これは、厳密な意味での(三角関係)ではない。二つの愛(中納言と尼姫、中納言と唐后)が二重化し錯綜している、というにすぎない。

『源氏』の第二部(女三の宮の降嫁から始まった光源氏の苦悩の後半生)とは、かなり異質の世界である。第一、二人の主人公の年令が違う。光源氏は人生の午後を迎えつつある四十歳であったのに対し、中納言はせいぜい二十歳前後である。二十歳の男性が(後半生)を迎えられるはずがない(その一方で、数年後の死を運命づけられている中納言は、短い人生の晩年を迎えている)。

『源氏』の第二部は、いったん自己実現を遂げ自分の世界を作り上げた人物が、自分の世界の真実の姿を検証してゆくという重苦しい雰囲気になっている。ところが、『浜松』では主人公の中納言が自己実現(心の成熟、人格の完成)を遂げていないために、(検証)する必要があるのである。『浜松』の重い世界は、実質的苦悩が空洞化された観念的なものである。

『源氏』の第三部(宇治十帖)は、第二部を踏まえて執筆された。『浜松』には宇治十帖の影響が濃厚なのだが、表層だけの類似と言えないこともないのである。

『浜松』の主題は、『源氏』とは違っているのだろう。(心の完成)とか(完成した心の崩壊)とかは、『浜松』作者の執着するところではない。むしろ、いつまでも主人公の心を完成させないこと、永遠に理想の男女をすれちがわせ永劫の間(転生)させつづけることの方に、『浜松』の眼目があるのだ。

6・5 中納言、吉野に籠もり、吉野尼君の臨終に立ち合う 中納言は、

ふと吉野尼君の夢を見た。(夢)に大きな意味を持たせ重要な役割を果たさせるのが、この物語の特色である。

吉野の山の入道の宮(吉野尼君)の御事の、うちしきり夢に見えて、心にかかりつつ、常よりもおぼつかなければ、よろづを棄てて、十月朔日頃つひなにおはしたれば、九月十余日のほどより、例ならずなやましくし給ひけり。(三三〇頁)

尼君は、中納言に吉野姫の後見を依頼したがっている。この依頼なくして死んでしまうと、娘への執心から尼君は極楽往生することができないであろう。その一方で、彼女の死の瞬間は一刻と迫ってきている。尼君は、追いつめられている。その切羽つまった思いが、中納言に通じたのだ。(夢)が、尼君の人生を好転させる契機となっている。

尼君は、臨終の際に奇瑞を見せて往生した。

ころころあまたたゆみなくさせ給ひて、われも念仏をし入りつつ、けふそくに寄り居ながら、やがて絶え給ふと見るほどに、いひしらずかうばしき香、このほどに匂ひて、むらさきの雲、この峰のほどに立ちめぐりたりと見おどろく。(三三三頁)

〈紫の雲〉は、往生譚に必須の素材である。しかし、それだけではなく、御伽草子『浦島太郎』で玉手箱の中から紫雲が三筋立ちのぼったとされる点とも関連するであろう。『浦島太郎』の主題は、生命の放棄を肯定的ニュアンスで把握することだと考えられるのであった(前掲拙著『御伽草子の精神史(参照)』。浦島太郎は、かけがえのない人生をあえて放棄することで、蓬萊への転生を実現することができたと推測されるのだった。吉野尼君は、最後の最後まで気がかりだった娘のことを中納言のおかげで忘れさり(放

棄し、自分の現世での人生を潔く捨て去って、往生したのである。尼君の魂は、肉体という容器から解放され、紫雲に乗って極楽という真実の世界へと上昇していった。異常なまでの芳香を撒きちらしながら。

6・6 中納言と吉野姫の服喪 尼君の死を見定めた中納言は、尼君の死を知る由もない唐后の替わりに喪に服せようと決意した。このあたりの中納言の心中は、かなり複雑なものである。

「我ばかりの人はいとかたかりけるを」とか「例なきあとを改めて」とかいう表現は(三三四頁)、中納言の比類なきすばらしさを自賛する性格のものである。自分自身が古今東西の比較を絶する新しい「祖型」である、という認識である。そして、中納言は、そのような自分と契りがあつて、子供まで生じた中である唐后のために、尼君の子供に自分がなつたつもりで服喪し、追善供養をしようというのだ。唐后の「不孝の罪」を、中納言が肩代わりすることになつたのである。

しかし、中納言は、自分かわいさ(自分につながらる唐后かわいさ)からのみ、服喪しただけではなかつた。そこには、唐后への愛(自分を滅して唐后に献身する気持ち)が、確かに介在していたのである。

中納言は、父を愛していた。父を愛していたからこそ、父の死後まもなく再婚した母を許すことができず、父の転生した三の皇子と対面するために渡唐したのもあつた。そのような中納言は、唐にあつて実母の死をとむらうことのできない唐后の「大罪」が、痛いほどわかるのである。

「唐后は」かかる事(尼君の死)やはあるなど知り給はで、(唐で)琴うち弾きなどしてこそ、ながめ給ふらんかし」と、(中納言は)悲しうおぼしやられて、…… (三四〇頁)

「この頃(唐后は)かかる色(＝服喪のための墨染の色)にもやつれ給はで、一方ならぬ花の色いろをこそ、尽し重ねておはすらんかし」と、まづ思ひでたてまつるに、…… (三四八頁)

何度も繰り返される唐后の不孝の罪。その罪を、中納言が清めてあげるのである。自分が死穢に触れることを厭わずに、唐后のために、中納言は尼君の後世をとぶらうのだ。ここには、「泰山府君の祭り」にも通ずる発想

の形式が存在する。泰山府君の祭りには種々のレベルがあるが、その根幹をなす思想は、自分自身をあえて犠牲にすることで自分にとってかけがえない大切な人を幸せにしようとするものである。中納言は、

かばかりおぼゆることならば、官位をとられ、おほやけの罪にあたらん、苦しかるべきにあらず。 (三三四頁)

とまで、思いつめている。中納言は、唐后のために自分を犠牲にする覚悟ができていた。中納言は、唐后への愛ゆえに、海を隔ててはいるもの彼女と強く一体化しているのである。

ちなみに、三の皇子(父の転生した人物)と中納言(子)も、海を隔てている。互いに互いの死に目には合えないであろう。しかし、中納言の場合、まもなく死去するであろうことがほぼ確実であり、中納言の大罪(父の転生である唐の三の皇子の喪に服せないこと)は発生することがないだろうと予測できる。

吉野姫は、母に死なれたショックから氣を失つたが、かろうじて蘇生した。彼女の気絶は、母の往生の障害でありつづけた自分自身への絶望の結果とも解釈できるし、自分の生命に替えて母の蘇生を祈つたためとも考えることができる。後者の場合は、尼君が極楽往生という理想世界への転生をすることができたので、姫君の死の必要がなくなつて彼女は蘇生した、ということになる。

なお、吉野姫を蘇生させようとして、人々が「顔に水をいささかかけなすれど」(三三六頁)云々と努力した旨が書かれているが、このあたりは『伊勢物語』の五九段と似ている。

かくて、ものいたく病みて、死に入りたりければ、おもてに水そそきなどして、いきいでて、……

と、『伊勢』にはある。『伊勢物語』の古注釈書は、「冷水ヲ以テ、面ニ灑グ」という仏典の一節を引用するが、何か招魂の儀式でもあつたのだろうか。興味をそそられる件りではある。

再び、話題は中納言のことになる。中納言は、かつて自分が父(故式部卿宮)と死別した時の悲しさを思い出す。

故宮亡せ給ひぬると見しほどの心きは、物やおぼえし。

(三三七頁)

中納言(男児)が式部卿宮(父親)と死別した悲しみが、(祖型)として物語作者には意識されている。そして、今、その祖型が反復されたのである。吉野姫(女児)が吉野尼君(母親)と死別するという形に変容を施されてはいるものの、確かに反復されたのである。あとに残る者の悲しみは、いつも大きい。ただ、去りゆく側の(執心)の程度は、相当の開きがある。式部卿宮は中納言を愛し、たとえ人間として転生しても再会したいと考えていた。一方、吉野尼君は、極楽往生したいがために娘との縁さえ絶ちたがっていた。二人の親は、違う種類の(転生)をしたのである。

中納言は、吉野姫と二人だけになった。恋しい唐後の形見(ゆかり)は、もはや彼女一人なのだ。中納言は、吉野姫への興味を抑えることができない。〈喪〉の期間は人間関係の消滅を語るものではあるが、その中にも新しい人間関係の開始が予感されているのである。なお、吉野姫について、ただいひしらず恐ろしげにて、角など生ひたりとも、うとまじう思ひのがるべきにもあらぬに、…… (三三八頁)

とある部分は、吉野姫をマイナスの(変化の人)の可能性があるとすることもである。彼女が中納言に幸福をもたらすプラスの(変化の人)であるのか、鬼が中納言を取り殺すために美女に化けてきた存在であるのかは、まだ誰にもわかっていないのである。

6・7 尼君を峰の上に埋葬する 吉野尼君の遺体は、

いたく日ごろ経べきことにもあらねば、見渡しなる峰のうへに、聖にかたらし給ひけん遺言のままにしたてまつりつつ、…… (三三八頁)

とあるように、現在の居所からずつと上の方の峰の上に葬られたのだった。ここには、(如意宝を山上に埋める)という発想の形式が内在しているようである。昔から如意宝を山頂に埋めるとか山頂で燃やすとかする説話は、数多い。『竹取物語』の末尾も、このパターンに属するものである。『浜松』の場合は、如意宝を遺体という形態で具体化しているものであり、遺体が山上に埋められることで世の中の安泰(娘である吉野姫達の子孫繁栄)がも

たらされるのである。(峰の上)は、天上に最も近い場所であると同時に、そこから人間世界の出来事を見守ることができると境界線上の空間である。尼君は、娘を(絆)と認識して斥けはしたものの、それなりの幸せを祈つてはいるのだろう。

さて、遺体を山に埋めることの神話的類型としては、イザナミの埋葬を指摘することができる。『古事記』には、

故、其の神遊りし伊邪那美神は、出雲国と伯伎国との堺の比婆の山に葬りき。

と記載されているのである。夫から見てもかけがえない如意宝であり、国産みをおこなってきた妻が死んだのだ。そのイザナミの遺体(如意宝)は、山に埋められたという。『古事記』の記述は、(如意宝を山に埋める)という大きな話型の中に位置づけられるのである。そして、『浜松』もその話型の中に含まれている。

6・8 中納言、吉野尼君の死を唐后へ伝えたく思う 中納言は、親の供養に参加できない唐後の不孝の罪を思う。

思ふべき思ひをひとり思ふにも行きて語らんまぼろしもがな。

(三四〇頁)

(まぼろし)は幻士のことであり、人間世界と異郷とを自由に往還できる仙人を意味する。『源氏物語』桐壺巻の、

尋ねゆくまぼろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく

を踏まえている。中納言は、日本と唐との決定的な距離感を認識する。中納言と唐后は互いに生きていながら、生きた玄宗と死んだ楊貴妃との隔たりと同じ隔たりを感じているのだ。かつては、そうではなかった。中納言は、海を越えて日本と唐を往復したのだった。中納言は、彼自身が(幻士)まぼろし)でありえた。しかるに、今彼は、日本と唐の距離感の前に絶望し、打ちひしがれている。

この隔たりは、何によつて埋められるのだろうか。可能性としては、二つある。一つは、(夢)であり、もう一つは、(転生)である。片一方の切実な思いがもう一方の夢の中で通じることあれば、現在の生のありよう

を放棄してもう一方の住む人間世界に転生することで再会することもある。やがて、その両方の手段（夢と転生）によって、唐后は日本へと生まれ変わってくることになるのだ。〈夢〉と〈転生〉は、機能としては〈幻士〉とほぼ等しい役割を果たしている。

6・9 吉野の雪 喪に籠もる中納言は、吉野の雪にも降りこめられている。その自然描写が独特なのである。

木々の木の葉、残りなうなりにたるに、雪うち降りて、鳥どもの立ちさわぐげしきもいとあはれにて、「鳥は林とちぎれり、林枯れぬれば鳥」と、いとおもしろう誦じ給ひて、「この人（吉野姫）を例ざまに思ひなぐさめさせて、少しうちとけ見なれて、かやうの空のけしきをも、鳥のさへづりをも、共に見ばや」と心もとなくおぼえ給ふ。

(三四一頁)

鳥と林と雪の三者の関係は、何を象徴しているのだろうか。〈鳥〉と〈林〉は、切つても切り離せない共棲関係にある。鳥は林の中で生き、林は鳥を育むことに喜びを感じる。しかし、その共同生活（精神的紐帯）は、〈雪〉という妨害者によつて断ち切られた。そして林は枯れ、鳥は居場所をなくして立ち騒いでいる。

この場面は、中納言と吉野姫の関係を叙しているばかりでなく、中納言と唐后の関係までもが象徴的に語られている、と解釈した方が面白いのではないか。中納言と唐后の精神的連帯は、空間的距離（雪）によつて引き裂かれている。そして、中納言は、唐后の〈ゆかり〉である吉野姫と結びたれようと願っているが、二人の間には目に見えぬ障害物（雪）が存在している。

さらに空想を逞しくすれば、〈林〉と〈鳥〉は、〈肉体〉と〈魂〉の比喩表現だと言えないこともない。身と心、精神と肉体の一致が、鳥と林の共存共栄に象徴されているとも受け取れるのである。〈肉体〉は、人間世界に対する世俗的・情愛的な執着心であり、〈魂〉は、はるかなるもの・真実のもの・極楽世界に対する憧れでもあろうか。そして、〈魂〉と〈肉体〉の乖離状態を理想的なものとして納得する時、人間に真実の〈解脱〉の瞬間

を訪れることになる。吉野尼君は、自分の肉体的分身である吉野姫を切り離し（即ち、分離状態を肯定することで）、極楽往生した。中納言は、唐后と海を隔てられている。それを苦悩としてではなく、悟りの好機と認識しさえすれば、輪廻を断絶して往生することも可能であろう。愛する女性と幽明境を異にした男性が、それを契機に世の無常を悟り発心する説話は数多い。しかし、『浜松』の中納言はそうではない。あくまで、〈再会〉を求めてやまないのである。

「まことにあらたにたふとかりし人の（尼君の）御最期かな。をとこなる聖だに、いとかくいぢるき事は難かるべかんめるを、かばかり思ひ取りて、浅からざりける絆をおきながら、いかでいと底清くおぼしすましけん」と思ひやるも、いとあはれにめでたし。

(三四二頁)

という中納言の思いは、肉体と精神の分離が、肉親への盲愛からの覚醒であることを彼がうすうす知っていることを示している。しかし、全身的に悟つてはいない。〈鳥〉と〈林〉の共棲を理想的なものとしてながめているからである。

6・10 中納言、乳母の妹に吉野姫を託す 帰京を決意した中納言は、吉野姫を都に迎えるまでの期間彼女の面倒を見させるために、乳母の妹を吉野に呼び寄せた（三四二〜三四三頁）。

中納言は、如意宝の所有者である。主君の役に立つ有能な従者や女房を、数多く所有しているわけだ。ここでは、中納言は〈二つの玉〉の所有者として発想されている。中納言は、〈乳母〉と〈乳母の妹〉という女性を二人所有している。彼女らは、

「淵に（身を投げる）」とありとも辞ぶべき方なきに、……

(三四三頁)

という献身的従者である。そして、肝心なのは、乳母は〈若君〉を養育し、乳母の妹は〈吉野姫〉を見守っている、という図式である。中納言は、〈若君〉と〈吉野姫〉という二つの玉の所有者でもあるのだ。〈乳母〉と〈乳母の妹〉が姉妹という点でつながっていたように、〈若君〉と〈吉野姫〉はど

ちらも唐後のゆかりという点で共通している。若君は唐后の子供であり、吉野姫は唐後の妹なのである。

中納言は、何通りもの〈二つの玉〉の所有者なのである。ちなみに、尼姫(一)大姫)と唐后も、非常に重要な〈二つの玉〉なのであった。

6・11 中納言、帰京を決意し、吉野姫に語る 中納言は、帰京に際して、吉野姫の上京をも促したのだった。

「かくてのみえ閉じ籠もりては侍るまじければ、いで侍りて、おはしますべき所など、さるべきやうにて、御迎へにと思ひ侍る。……」

(三四四頁)

この場面(中納言の吉野籠もりの終了)は、総角巻で薫が大君の喪に籠もる箇所と類似している。大君に死なれた薫は宇治に籠もり、喪があけて上京する時に中の君の上京を促したのだった。ということは、『浜松』の吉野姫には、宇治十帖の中の君のイメージが投影されていることを示している。中の君は、姉の大君のゆかりであり、吉野姫も異父姉である唐後のゆかりなのである。

吉野という空間に、〈中納言〉と〈吉野姫〉の二人の美男美女が存在していたのである。しかし、この構図が永続することはありえない。中納言と吉野姫が、並び称される〈二つの玉〉の関係にはないからである。中納言は吉野姫の所有者(保護者)であり、吉野姫は中納言に所有される者(保護される者)である。それが、二人の正しい人間関係である。二人は、一つの空間の中で心と心を融け合わせることはないのだ。

ここに、中納言と吉野姫の未来が、見事に予見されている。二人は結ばれそうである、結局結ばれることはなかったのである。そして、その点に〈吉野姫—中の君〉という類似関係の根本的意味が発見できよう。中の君は薫と結ばれることはなく、薫のライバルである匂宮の妻となつたのだ。吉野姫も、中納言のライバル(式部卿宮)と結ばれることになるであろう。『浜松』は、その名前を表面に出すことなく〈式部卿宮〉登場の準備作業を行っているのである(むろん、この式部卿宮は中納言の父とは別人で、当帝の皇子である)。

6・12 中納言、吉野尼君をしのぶ 四十九日も過ぎて、中納言の帰京の日も近づいてきた。中納言は、吉野姫と尼君をしのんだ。

(中納言) 君ひとり如何にながめん見し人は煙の中の月となりなき(吉野姫) 立ちのぼる煙の中にくらされて月となりけん空も知られず

(三四七—三四八頁)

煙の中の月は、煩惱の霧の彼方から光を射し入れる真如の月である。ここには、吉野尼君が見事に往生を遂げたことが暗示されている。かつて、尼君の魂は肉体の中に閉じ込められていた。言わば、〈箱の中の玉〉であった。そのような〈容器の中の如意宝〉が、煙となつて容器を脱出し、大空へ上つていつて〈月〉となつたのである。これは、これまで何度も指摘してきたような如意宝の能動的放棄のパターンである。浦島太郎が玉手箱を燃やしたように、『竹取物語』の帝が不死の葉壺を富士山頂で燃やしたように、尼君は現世の生活を捨てたのである。〈煙〉という語が中納言と吉野姫双方の和歌に詠まれているのは、そのような話型的文脈の中で解説されるべきであろう。

中納言も吉野姫も、まだ吉野尼君の心境には到達してはいない。彼らは、煩惱の霧におおわれているのである。『源氏物語』御法巻に、紫の上の野辺送りする光源氏が涙にかきくれて仲秋の名月を見ることができなかったという件がある。紫の上が吉野尼君の境地に達していたかは別として、光源氏が吉野尼君に先立たれた吉野姫の心境(月となりけん空も知られず)であることは確かであろう。吉野姫が尼君の絆であったように、光源氏は紫の上を最後まで苦しめていた張本人なのであった。

6・13 中納言と式部卿宮 中納言は、好色な式部卿宮より先に吉野姫を発見したことを心の底から喜んだ。

式部卿の宮の、さばかりかからぬ限なく、我が思ひに叶ひたらん人をとたづね求め給ふに、えたとづねより給はざりけるよ。人よりさきに、かかる人を見つけたる我が契りのうれしきも、…… (三四八頁)

中納言は奥山で美女を発見し、それを都へ連れていこうとしている。これは、へ山奥から如意宝を掘り出すという話型である。そして、それはへ山

上に如意宝を埋める」という話型(6・7参照)と、一對をなす性格のものである。尼君の山上における埋葬と吉野姫の下山とは、対応しているであろう。

『源氏物語』に当てはめてみると、まず北山から紫の上を掘り出した若紫巻が思い浮かぶが、そこには競争者の脅威は語られていなかった。光源氏は紫の上の実父より先に彼女を自邸に引き取ることに成功したのであるが、それは一人の女性をめぐる二人の貴公子のさや当てとは言えないであろう。『浜松』のこの箇所は、若紫巻よりも夢浮橋巻と似ているのである。小野の山里に浮舟が生存していることを知った薫は、ライバルの匂宮より先に浮舟の消息をつかんだことを喜ぶ一方で、匂宮が浮舟の生存を知っているのではないかという幻影に脅えている。浮舟の下山が、吉野姫の上京と対応しているのである。

中納言は、さまざまの女性遍歴ののちに吉野姫を発見した。中納言は、本心に吉野姫をへ愛している」と言えるのだろうか。

河陽県の御ゆかりをたづねきこえざらましかば、かかると人も見ましや。(三四八頁)

思ひなしにや、(吉野姫と唐后が)いとよく通ひたまへる、あはれにこよなかるべきなぐさめなれど、……(三四九頁)

唐后とよく似ており、唐后の(ゆかり)である吉野姫。その吉野姫によって心の空白が埋められる一方で、中納言は次のようにも思う。

ただ一人の御ゆかりの本体(唐后)を思ひ出づるに、あはれに悲しう、……(三四八頁)

風のつてにてもおのづから、「(中納言が吉野姫によって)さてこそなぐさめてあんなれ」と(唐后に)聞かれたてまつらんを、いと空恐ろしうはづかしう、……(三四九頁)

かくもとの御心(唐后への愛)の思ひのみこそいよいよまされ、それ(吉野姫)にうつろひ慰めんと、思ひ急がるる心もなく、……(三四九頁)

コピー(吉野姫)でも用は足りるのだが、中納言はあくまでもオリジナル(唐后)を求めてやまないのである。光の本体、美の本源に対する強い憧れが、中納言にはあるのだ。事情は、唐后の側でも同じであろう。『浜松』における恋人達は、どんなに隔たつていても(幽明境を異にしたとしても)本人同士の間を希求するのである。代理で満足することが、どうしてもできないのだ。それが、彼らの(転生)を物語内に呼び込んでくることになる。(転生)と(ゆかり)は、ある面で類似するものの、互いに他方を否定しあう性格の概念でもあるのだ。

さて、オリジナルをよしとしてコピーを二流とする中納言の発想方法の間隙をぬうようにして、吉野姫をオリジナルとして愛する式部卿宮が出現するわけだが、今は深入りを控えておくことにしよう。

6・14 中納言、上京す 中納言が、吉野を出発する日が、遂に訪れた。その日のようすは次のように語られている。

今ぞ立ち出でて、尼上のおはせし方などを(中納言が)見給へば、ただありしながら、明暮よみ給ひし経、数珠物の具はありながら、……(中略)また頼むかげもなく、心ほそき身を捨てたまへる身(吉野姫)の(尼君への)うらみは、つきすべき世なかりけり。(三五〇～三五二頁)

葵の上の喪があけた時の葵巻の描写と似ているが、椎本巻で薫が亡き八の宮をしのぶ場面ともかなり似ている。『浜松』の作者は、『源氏物語』を相当に咀嚼して自家薬籠中の物としている。その『源氏』の引用ぶりは、自由自在の印象を与える。

中納言は、吉野を出発して京へ向かった。

中納言は心のかぎりどめおきて、出で給ひし道すがらも、立ち還りぬばかりおぼされながら、姫君、若君、上などのおぼつかなきに、いぶせきほどになりければ、駒うち早めておはしましぬ。(三五二頁)

中納言は、(心のかぎり)を吉野姫のもとに残してきたという。しかし、その(心)に形を与えた物質としての如意宝がここには存在しないのである。『浜松』の唯心主義的特徴が反映している、と言ってもよいであろう。

「へ心」を「へ心」のまま表現し、「へ形」を与えないのである。この物語の中では、厳密な意味での心物対応構造は見うけられないのだ。

中納言は吉野姫と別離することで大きな執着心を発生させてしまったのだが、何がその別離を促進させたのだろうか。ちご姫君や若君という自分の子供達への愛、更には母親（「上」）への愛が、中納言の上京を急がせたのである。むろん、ちご姫君や若君の母親（尼姫と唐后）への愛も、中納言の心の中にはわだかまっていたことであろう。吉野に留まると都の人間が気がかりであり、都に出ると吉野の吉野姫が心配である。かつては、唐にあつては日本の大姫（尼姫）をしのび、日本に帰つては唐の唐后を懐かしんでいた。中納言は、どこにいても「愛執の絆」によって苦しまざるをえないのである。わずかに二十数年間の人生で、中納言はそんなにも多くの絆を作ってしまったのだ。

6・15 中納言、尼姫と語らう 都に戻つた中納言はさっそく尼姫と対面し、吉野で見てきた吉野尼君の極楽往生のようすを語つてきかせた。紫雲たなびく往生を聞かされた尼姫は、自分も吉野のような奥山で仏道修行に励みたいと思う。

「同じくはさこそ心ぼそう、ふかからん山住み離れて、同じくはさこそあたまほしきを、さすがに心より外の身のありさまかな」

（三五二頁）

「（私の）いと深からぬ心は、すまひがらにこそ」

（三五三頁）

尼姫が願っているのは、自分自身の居場所を変えることで、人生を好転させることである。魂の容器を取り換えることで、魂（精神）の一大変革を行おうというのだ。尼姫に対して、中納言はその逆の考え方を提示する。

「すまひの深き浅きにもよらじ、いづくにても、ただ心からにてこそあらめ。市の中にてこそ、まことの聖は無上菩提を取りけれ」

（三五二〜三五三頁）

どんな場所においても、人間の悟りは開けるものなのである。現在の自分の容器を否定し別の容器をむやみに求め歩くのではなく、現在の容器の中にひたすら沈潜し籠もることで真実の自分自身が発見できることがあるの

だ。そして、悟りを開いた人物にとつては、不満足な容器（たとえば、「市の中」）も立派な容器へと変貌するのである。

実は、尼姫の考えも中納言の考えも、どちらも真実を含んでおり、一概にどちらか一方があやまりであるとは断言することが不可能である。尼姫の考えは、空間移動としての旅の希求であり、個・孤の救済としての悟りへの憧れであり、山にのぼり山に籠もる人生の選択である。それに対して中納言の考えは、居ながらにしての心の内界への旅への希求であり、他者との同時救済としての悟りへの憧れであり、山から下りて市に交わる人生の選択である。小乗仏教と大乘仏教の違いと言つてもよいかもしれない。あるいは、絆を断ち切つて極楽へ一人でだけ往生する精神と、絆に引かされて極楽往生することができず人間界に再度転生してくる精神との相違と言つてもよい。

『浜松』の作者は、二つの対照的な考え方のどちらの方を重視しているのだろうか。作者は、二人のやりとりの直後に次の一文を挿入している。

何事につけても、大井の物語のやうに、共に葉の声を待ちつけけんとのみ契りかはし給ふさま、心深くあはれなり。

（三五三頁）

『大井の物語』が引用されているわけだが、これは散逸物語である。大系補注六七六は、その粗筋を復元して、

二人の男女（あるいは、出家して山に行かないすましていた男と、かつてその愛人で今は尼になつてゐる女）とが、共に葉の声を聞きつつ、極楽浄土に迎えられたという筋であるようである。

と、推測している。三角洋一「物語文学全覧」（『別冊国文学・王朝物語必携』）は、

葉の音とともに極楽の迎えが来るが、最愛の人と連れ立って往生したいと断わる場面があるか。二人とも迎えられるか。

と、推測する。いずれにしても、男と女の同時救済が眼目となつてゐるのである。男と女は、僧と尼の可能性もある。つまり、『浜松』の作者は、尼姫の考え方よりも中納言の考え方の方に肩入れしていると考えられるのだ。『自己と他者の相互救済』が、『浜松』の思想なのである。それは、「自

己と他者の相互苦惱」とほとんど同じ意味なのではあるが。

実は、『大井の物語』は、宇治十帖の夢浮橋巻以降の薫と浮舟のあるべき姿を表現しているのである。浮舟の還俗とか薫の出家の有無はしばらく不問とする。後期物語（散逸物語を含む）は、繰り返し繰り返し（男女の相互救済）を語っている。それは、『源氏物語』夢浮橋巻が提示した方向を発展させたものだったのである。『大井の物語』の女性も、『浜松』の尼姫も、どちらも（その後の浮舟）と呼んでも不自然ではないと私は思う。

6・16 吉野姫の苦惱 尼姫の山へのほりたいたい願望と、中納言の市に交わる姿勢とが激しく角逐しているようすは、既に見てきたとおりである。それと対応するかのようには、吉野姫も山を下りるべきか山にとどまるべきかで苦悩することになった。

中納言は、吉野姫の手紙を見てその見事な筆跡に感嘆する。〈前世の功德〉によって美貌の所有者として生まれただけではなく、彼女は目に見えぬ才質にも恵まれていたのである（三五六頁）。しかし、吉野姫の前世は本当はどのようなものだったのだろうか。善根を積んだゆえに美女に転生してきたのだが、同時に作ってしまった悪因によって往生できず人間（それも罪深いとされている女性）の世界を輪廻することになった。彼女は、美女である以前に罪深い人間である。そして、美女であることによって、現世でも心ならず式部卿宮と関係することになってしまう。〈美女〉であることは、必ずしも良いことばかりではないのだ。

さて、吉野姫は吉野山を下りるべきかどうかで迷っていた。

げに「さそふ水あらば」と思ひぬべけれど、この山をあくがれ出でん行末知らず、跡はかまなき身のありさまなれば、「いかでかは」とときき給へれど、さかしう、ともかくも言ひ出づべき方もなし。

（三五六頁）

吉野姫は、人生の選択肢を二つしか持たない。山にとどまり孤独の人生を生きるか、山を下りてどろどろとした人間世界で生きるかのどちらかなのだ。彼女の母親は、人間世界で男女関係で苦しんだあとで出家して山にのぼった。吉野姫の人生は、母親（吉野尼君）の人生と逆の軌跡を辿ることになる。

山で清らかな生活を過ごしたあとで、都の男女関係で苦しむことになってゆく。人生の軌跡が、母親と娘とで反転してしまうのである。

先程引用した箇所は、下山拒否の心情が強いことを示しているが、小野小町の「わびぬれば身を浮き草の根をたえてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ」を引歌していることからわかるように、下山に傾く気持ち吉野姫にないこともないのである。小町の歌は、現在の自分を収納している容器への絶望と、新しい容器への移行願望を詠んだものである（拙稿「歌の論理と家集の論理」参照、『電気通信大学紀要』1巻1号、昭63・6）。吉野姫も、山を下りて本格的な人生を開始することを期待しないわけではないのだ。

吉野姫が下山をしつつしているのは、都（新しい容器）の中で自分が占めるべき位置がまだ確定していないからである。彼女は中納言の妻でもなく、愛人でもなく、ましてや娘（養女）でもない。宇治十帖の中の君も下山（宇治を離れること）で悩んだ女性だが、彼女は匂宮の妻の一人ではあった。その点では、吉野姫の躊躇は、中の君よりも大きかったはずである。

6・17 聖、吉野姫の運命を予言する 吉野姫を迎えに来た中納言に向かつて、吉野山の聖は次のような予言をする。

ただし、（吉野姫を）返す返す見給ふに、またならびなくかしこくおはしぬべきを、二十がうちに世（男女関係）を知らせ給はば、わが身破られ給ふべき宿世のおはするなん、いとおそろしう侍るべき。このごろも、この事とざまかうさまに見給ふるに、二十がうちににんじ給はば、すぐしとほしがたうおはします人と見え給ふこそ、いとたいだいしけれ。今年十七歳にやならせ給ふらん、今三年は猶つししみ給ふらんや、善からん。

（三五八頁）

この予言は、吉野姫の寿命を提示したものであり、中納言が二十四、五歳で死去するだろうという予言（6・2参照）と対応していると考えられる。ただし、この箇所は本文に大きな揺れがあつて文脈が混乱しており（大系補注六九三・六九四・六九五参照）、正確な意味がなかなか把握しにくいのである。大雑把に大意を汲んでおくと、吉野姫は二十歳以前に男女

関係を知ったら死んでしまう運命にある、今は十七歳だからあと三年間は純潔を守らなければならない、ということだろう。『長谷雄草紙』（百日間美女と交わつてはならないという禁止が語られている）とよく似た趣向である。

この予言は、いろいろに解釈することが可能である。もともと〈予言〉そのものが曖昧性の上に立脚しているのだが、この予言の『浜松』において果たす機能も、さまざまに解釈できるのである。

第一に、中納言を中心に見る立場がある。「三年間男女関係を交わすな」というのは、一種の〈見るな禁〉である。普通は、この禁止に違反して男には不幸が訪れるのだが、中納言は実直なので、この〈見るな禁〉を守り通したのだった。その結果、中納言の運命が少しは好転することになった。

第二に、中納言以外の男性を中心に見る立場がある。中納言が躊躇して吉野姫と関係しないうちに、予言を知らない第三者が吉野姫と関係する、という構想を実現するためのものだと取れるのだ。

第一と第二の視点は、実は連動している。実際の物語は、吉野姫と式部卿宮が契り結び、唐后の転生である女兒が吉野姫の胎内に宿る、という方向で進展してゆく。〈見るな禁〉は、中納言と唐后の転生である女兒とが〈親子関係〉にならないための工夫だったのである。もし中納言が長生きすれば、彼は唐后（正確には、かつて唐后であった女性）とこの世で結ばれることが可能である。

三番目には、吉野姫を中心に見る立場がある。姫は、二十以前に関係すると必ず死んでしまうという。つまり、かけがえのない子宝（『如意宝』をこの世にもたらすのと引き替えのようにして死去する、という構想がほの見えるのである。光源氏（たぐい稀なる如意宝珠）を誕生させることが母である桐壺更衣の死を早めたことが想起される。『源氏物語』は、他にも葵の上や八の宮の北の方など、出産時に死去してしまった女性を造型している。彼女達は、我と我が身を犠牲にすることで、貴重な如意宝をこの世に出現させた人物なのであり、私が〈海人型〉と仮称する話型の上を生き

てゆく女性なのである。

巻五の終了時点で、吉野姫は式部卿宮の子（唐后の転生）を身ごもっている。そして、重い病状にある。もし巻六が書かれたとするならば、吉野姫は女兒を出産後に産後の肥立ちが悪くて死去したことであろう。

以上の三つの見方は、すべて錯綜しているのである。互いが互いを否定するのではなく、三つの立場がすべて実現するような方向で物語世界が一つに収束してゆくのだ。その過程で、『浜松』は曖昧な構想（予言）を固定した表現へと変容させてゆくのである。

しかし、何度も述べてきたように、中納言はまもなく死去し、唐后の転生した女兒とは結ばれないだろうと推測される。中納言も吉野姫も、それぞれが更なる〈転生〉をすることになるのだ。

6・18 吉野姫、山を下りる 吉野姫の下山は、聖の予言のあとでは〈男女関係〉との関連でしか考えることが不可能である。夢浮橋巻の横川の僧都は、浮舟に下山して（還俗して）薫とやり直すようにとアドバイスした。『浜松』の聖は、吉野姫の下山に賛成したのか反対したのか、今一つ鮮明ではない。又、男女関係を否定したのか、三年後の結婚を勧めたのか、これも判然としない。ただ、聖は下山する吉野姫が三年以内に男女関係を知り、大きな苦悩に直面するだろうことを、うすうすながら知っていたであろう。知つていながら、止めなかった。吉野姫の下山が彼女の宿命であることを知っていたからである。

吉野姫には、さつそく男女関係めいたことが発生した。中納言が下山の前夜に彼女と同衾したのである。「袖ばかりは引きかはし添ひ臥して」（三六〇頁）とあるから、もちろん二人の間に実事はなかった。しかし、下山が吉野姫を男女関係の渦に巻き込むことを十分に予感させるものではあった。

吉野姫は、唐后を、

（唐后は）など（私と）おなじ世におはせけん。

（三六一頁）

と懐かしむ。吉野姫は、姉の唐后を慕っているわけである。この願いは、後に吉野姫の娘として唐后が転生してくることで一瞬ながら実現する。し

かし、吉野姫の死によって、〈再会〉は〈別離〉へと転じてゆくのである。その点は、反魂香の故事と通いあうところがある。孝武帝は反魂香をたくことで亡き李夫人と再会したが、香の煙が絶えると李夫人の姿は消失してしまつたという。

吉野姫は、出産と前後して（唐后と再会した喜びをかみしめるゆとりもなく）死去するであろう。唐后も吉野姫の娘として転生してはきたものの、物心がついた頃には母（吉野姫）はこの世の人ではなくなつてしまつていく。即ち、一瞬の再会によつては、吉野姫の姉への執心は晴らせないのである。それは、執着心をいよいよ増加させるだけだ。唐后の妹への執心も、それと同じことだろう。

『浜松』の作者は、人間の血の絆を見つめつづけている。そして、それを拡大させ極限にまで達せさせるのである。

中納言は、吉野姫の唐后への思いを察知して、

（三六二頁）

かたみにそのゆかりとおぼせ。
と告げる。私があなたを唐后の（ゆかり）と思つているように、あなたも私を唐后の（ゆかり）と思つて下さい、というわけだ。中納言と吉野姫は、媒介項（＝唐后）の存在によつて強く結ばれている。擬似（血の絆）とでもいったところだろうか。血のつながる人間同士だけではなく、血のつながらない人間同士までも、『浜松』の作者は愛執によつて結びつけようとするのである。

吉野姫は都で、まず若君を見る。この若君は、中納言と唐后の間に産まれた子供である。吉野姫と若君は、オバとオイの関係に当たる。というよりも、吉野姫と若君は、唐后を媒介項として結びついていると言つた方が正しいかもしれない。若君は、吉野姫によく似た。

（中納言が若君に）「これ（＝吉野姫）ぞ母よ」と言ひ知らせ給へば、いとひとつきにうつくしげに、さるべきもののゆかりは空に知らるるにやと見えて、うちつけにいささか立ち離れず、（吉野姫を）母とつけて、夜もただ懐（ふとろ）にのみ寝たまふを、……（三六四頁）

若君は年のまさるままに、いとうつくしう、この人（＝吉野姫）の渡

り給ひし後に、乳母（めのと）のあたりにもよらず、夜も昼も母と言ひて、あたりも離れずまとはれたるもあはれに見ゆ。（三七二頁）

若君は、無意識のうちに（血の絆）を発見した。（母のゆかり）を見つつけ、吉野姫に甘えているのである。若君と吉野姫を一つの場所においておくことは、若君と実母（唐后）との再会を可能にするための伏線であるのかもしれない（4・22参照）。血の絆をくだいまでに確認（あるいは再確認）することは、『浜松』の基底をなすモチーフである。

6・19 中納言、吉野姫への愛を自制する 中納言は次第に吉野姫への愛の高まりを覚えるが、吉野山の聖が口にした予言も恐ろしく、又尼姫への気がねもあつて、吉野姫と情交を結ぶには到らない。

心あやまりしぬべき折り折り多く、人やりならずしのびがたけれど、世に似ぬ御のめづらしさは、聖の言ひし事も恐ろしう、……（三六五頁）

されどこの人を切に思ふ心ざしに、聖のいひし相恐ろしう、……（三七二頁）

聖の御相を思ひ怖ぢて、三年ばかりをかく見馴るるに心をなぐさめて過ぐさんと、あまりの思ふかたに忍びずぐすを、……（三七五～三七六頁）

中納言の頭には、聖の予言が焼きつけられている。三年間純潔を守らねば、姫は死ぬ。そして、当然その原因を作つた男性も、罰せられずに済むはずがない。中納言は、吉野姫が相手では（死を賭しての男女関係）に踏み切ることができない。浦島太郎や『竹取物語』の帝は、死を賭して愛の回復を祈つたのだが、中納言はそうではなかつたのだ。

しかし、もしも相手が唐后だつたらどうだろうか。中納言はすべてを忘れて、互いの明日の命も知らずに、〈現在〉における愛の充実を求めたのではないかという気が私にはする。

聖の予言は、一種のタブーの設定なのである。このタブーに違反すると、女は死に（『長谷雄草紙』と同一パターン）、男も罰を受ける。けれども考えてみると、中納言は生きて二十四五歳の坂が越せるか甚だ心もとないの

だ。中納言も、自分の死期を知っている。しかるに、吉野姫と情交しないのは、何を恐れているのだろうか。

ちなみに、中納言は、尼姫とも関係を結ぶには到っていない。尼と交わつた男性は、仏罰を受けるといふ。そのタブーが、中納言の念頭を去らないのである。中納言が吉野姫と関係しえないのは、彼が尼姫と関係しえないことの反復とも見なしうるだろう。〈実事を持ちえぬ女性〉としての祖型である尼姫、反復である吉野姫。吉野姫は、唐后のゆかりという点で、唐后(祖型)の反復である。そして中納言に愛されながら夫婦関係を結べないという点では、尼姫(祖型)の反復なのである。吉野姫は、二人の祖型を有している。

興味深いことには、中納言にとって愛する女性が帝の妻であるのは、全くタブーではなかった。唐后への愛が成立したゆえんだし、中宮との愛も可能性が指摘できるのである(4・15参照)。ましてやオジの妻である大武の娘とは、何の躊躇もなく密通できるのである。中納言のタブー意識には、独特のものがある。

6・20 中納言、四人の女性を垣間見る 左大将(中納言の義父)の邸宅で造営があり、中納言の母や、その娘で尼姫の妹でもある式部卿宮の北の方が、中納言邸(実父・故式部卿宮邸)に移ってきた。中納言は、たぐい稀な美しさを持つ女性を四人まで見ることができたのだ(三六六〜三六八頁)。

ちご姫君・母君・尼姫・式部卿宮北の方(尼姫の妹)の四人である。母、その二人の義理の娘、姉妹の娘というように、母系で三代におよぶ(美しき族)が一堂に会したのである。それを、中納言が「さるべきものの隅に立ち隠れて」(三六七頁)垣間見ている。これは、〈女業〉のパターンである。『源氏物語』だったら、四人の女性はそれぞれが得意な楽器を持って演奏していたことだろう。ちなみに、3・50にも、〈女業〉のパターンが内在しているのだ。中納言は、四人の美女(四つの美玉、四つの如意宝)を掌中にしているのであり、光源氏が四方四季の大邸宅に住み四人の美女を住まわしていることと話型的に対応するのだ。中納言の理想性を感じら

れる。

しかし、中納言はこっそり覗いているだけの存在なのであった。目の前に四人の美女を集めて、その華やかな場面を主宰しているわけではない。そこが、中納言と光源氏との大きな違いである。なおかつ、光源氏は旅のあとで自分の邸宅を造営したのだが、中納言は亡き父宮の邸宅を相続したにすぎない。それに四人の女性のうち真に中納言の支配下にあるのは、ちご姫君と尼姫の二人でしかない。

大将(中納言の義父の左大将)のものしう、きよらげにて入りおはず。(三六八頁)

とあるように、この場面の主宰者は左大将なのである。中納言の限界が感じられる。なお左大将を中心にこの場が構成されているのは、御伽草子「鉢かづき」とも通ずるものであり、〈繁栄する家長像〉の定着をめざすものである。

中納言は、かつて式部卿宮の北の方(尼姫の妹)を見たことがあるとされている。

(式部卿)宮の御方は紅梅どもにその色のおり物、梅の小桂、見そめし春の夕暮よりは、いとこよなうおとなび給ひけり。(三六七頁)

この記述に該当する箇所は、巻一にもみあたらない。おそらく散逸首巻に書かれてあったのだろう。『源氏物語』の薫が大君と中の君姉妹を垣間見たように、中納言も大姫(尼姫)とその妹(式部卿北の方)を同時に垣間見たことがあったのだろう。それは左大将邸であったかもしれないし、石山寺で大姫と契る直前であったかもしれない。

中納言は、今さらながら尼姫の美しさに驚いた。

これ(ニ姫)を又よのつねに、八尺の御ぐしを掻き垂れて、色々の御衣をたち重ねつつ、昔ながらの御ありさまにひきつくりひたらんは、この頃今を盛りに、いとどいかに光を放つ心ちして、目もあやにかかやかまし。(三六七〜三六八頁)

中納言は、尼姫を還俗させたくて仕方がないのである。現在は(尼を庇護する青年)なのであるが、(美女と幸福な結婚をする青年)になりたくて

しようがないのだ。ここには、タブー（尼との性交禁止）を解消したい気持ちが強調されている。それは、出家した女性を男性が庇護する事の中途半端さを示しているのだろう。そう考えると宇治十帖夢浮橋巻の未来は、尼姿の浮舟と薫との共同生活ではなく、還俗した浮舟と薫との共同生活だと考える方が適切であろう。中納言は、そのような理想的夫婦関係から切り離されている。そして、その原因（尼姫の出家）を作ったのは、中納言自身なのであった。

四人の女性の中で、ちご姫君だけが〔花〕に喩えられている。『鉢かづき』の嫁合わせの場面で、鉢かづき的美貌が群を抜いていたことと少し似ている。

児姫君、今咲き出づる花のほひして、いみじうをかしげにおはするを、……（三六八頁）

これは、ちご姫君の人生の栄華を先取りした表現だと言えよう。ちご姫君のかわいさを見た左大将（祖父）は、

母君（『尼姫』のくちをしう身をもてやつし給へるかはりをさへ取り添へて、この世の我が胸をあけむ。

と、思った。母である尼姫の苦悩、出家の功德によって、その娘の運命が切り開かれてくるのである（所謂〔海人型〕の話型）。

6・21 中納言、吉野姫を見る 中納言は、左大将一族の四人の美女を見たあとで、改めて吉野姫をみた。吉野姫は、美しかった。その美貌の説明は、各種の昔物語（定型的パターン）を引用することによってなされている。

絵に書きたるやうにめでたければ、……（三七〇頁）

今、吉野姫は母である吉野尼君の喪に服している。それだけに華やかさはないが、しっとりとした美しさが自らにじみ出てきているのだ。ちょうど、尼姫が尼姿でありながら潜在的美しさを際立たせていたのと同じようなものである。その吉野姫の美しさが、絵に画いたような美しさであると表現されているわけである。

おほえの皇子のむすめの王女の、秋の月によそへられけんは、かうこ

そありけめ。（三七〇頁）

「おほえの皇女のむすめの王女」は、たぶん散逸した物語の登場人物なのであろう。美女を月に喩える発想は昔からあるが、かがやくばかりの美しさを持つヒロインを、『浜松』以前の物語では満月に喩えていたのである。その物語が、ここでは引用されているのだろう。ここまでくると、次の『竹取物語』の引用は、必然である。

「さばかりはげしき奥山の中より、いかでかかる人生ひ出でけん」と、竹の中より見つけたりけんかぐや姫よりも、これ（『吉野姫』）はなほめづらしうありがたき心ちして……（三七〇頁）

かぐや姫も、月から天下つてきた輝く美貌の所有者である。『竹取物語』引用と「おほえの皇子のむすめの王女」引用とは、基盤を等しくしているのである。かぐや姫が典型的な白鳥処女（天人女房）だったように、「おほえの皇子のむすめの王女」も男を地上に残して昇天（死去）する白鳥処女だったのであろう。

中納言は、吉野姫を発見するに到った経緯を、心の中で反芻する。

われただ飽かずかなしき人（『唐后』のゆかりに、母君（『吉野尼君』）をたづねしほどに、かかる人（『吉野姫』）をさへ見つけたるは、わが宿世さへ人より事なりかし。（三七二頁）

〈ゆかり〉が、別の〈ゆかり〉を呼び込んでくるという構造である。唐后↓吉野尼君（ゆかり①）↓吉野姫（ゆかり②）という流れは、宇治十帖における薫の愛が大君↓中の君（ゆかり①）↓浮舟（ゆかり②）へと転移していった過程と共通している。

〈ゆかり〉の出現は、白鳥処女の昇天を受けて、その再来を語るものである。私は、この話型を〈逆白鳥処女型〉と仮称している。詳しくは拙稿「源氏物語における表現とその基盤」（『国語と国文学』昭56・7）を参照されたい。〈白鳥処女型〉が、男女の愛↓女の昇天というパターンであるのに対して、〈逆白鳥処女型〉は、女の出現↓男女の再会という軌跡を辿ることになる。一つの祖型が最初に提示されると、その祖型は〈反転〉したうえで反復されるのである。白鳥処女型と逆白鳥処女型の二つの話型の角逐

(というか、接続)に留意して、中納言の人生を要約してみることにしよ
う。

- (1) 中納言と唐后 唐で結ばれた二人↓中納言の帰国による唐后との訣
別
(2) 中納言と吉野尼君 I 中納言と唐后の離別↓中納言と吉野尼君の出
合い
(3) 中納言と吉野尼君 II 中納言と吉野尼君の心の交流↓吉野尼君の往
生

(4) 中納言と吉野姫 I 吉野尼君の死去↓中納言と吉野姫京へ上る
白鳥処女型(1)↓逆白鳥処女型(2)↓白鳥処女型(3)↓逆白鳥処女型(4)とい
うように、きちんと話型が反転しているのである。まるで振子のご
うに、二つの話型の間を唐后一族は往復しているのだ。ここまで反転現象が
つづく、この流れはもはや押しとどめることができなくなってしまう。
以後の物語の展開を、予測を含めてまとめておくことにしよう。

- (5) 中納言と吉野姫 II 中納言と吉野姫の愛の高まり↓吉野姫、式部卿
宮に領略されて去る
(6) 中納言と吉野姫 III 式部卿宮に連れ去られた吉野姫↓吉野姫、中納
言の許に戻る
(7) 中納言と吉野姫 IV 中納言と再会した吉野姫↓吉野姫の死去
(8) 中納言と唐后 I 吉野姫の死↓唐后の転生した女兒が誕生し、中納
言に育まれる
(9) 中納言と唐后 II 唐后の転生した女兒をいつくしむ中納言↓中納言
の死
白鳥処女型(5)↓逆白鳥処女型(6)↓白鳥処女型(7)↓逆白鳥処女型(8)とき
て、(9)で取りあえず話型の反転は一つの結着をつけることになる。
(1)は、男の帰国によって男女の仲が引き裂かれている。(2)から(8)までは
すべて女の方が男の許から去ったり戻ったりしている。(9)に到って、男の
死によって男女が別離することになる。(1)と(9)は、(2)から(8)までの物語の
枠組を形成する役割をはたしている。(9)で以て『浜松』は、一応のサイク

ルが終了するのである。中納言の死が必然だと考えるゆえんである。
6・22 式部卿宮の思い 式部卿宮は、理想の美女を求めつづけているも
の、そのような女性にはなかなか出合うことができない。その思いを、
式部卿宮は中納言に吐露する(三三七頁)。これは、式部卿宮が吉野姫を発
見することの伏線である。そもそも、話型の論理からすると、吉野姫は一
度中納言の手許から去らねばならないのだった。誰かが、吉野姫を遠くへ
連れ去らなければならぬ。その役目を果たすべく、式部卿宮が本格的に
物語世界に登場してくるのである。式部卿宮の人物造型に血が通い出すの
は、ここからなのだ。

式部卿宮は、次のように語る。

いみじからん天の岩屋よりも、ただ我心につきて、思ふさまならん人
をだに見つけたらば、それに、やがて我が世のとまりに定めて、動き
なくなりなんと思ひつつ、…… (三三七頁)

式部卿は、たぐい稀な美質を持つ自分とペアを組むべき理想の美女を捜
し求めている。(二つの玉)のかたわれを発見したいという熱意に駆られて
いるのだ。そういう美女(如意宝)は、海の彼方から、あるいは山の奥か
ら発見される。中納言は唐后と出会い、吉野山で吉野姫を発見したの
だったが、それと同じことを式部卿宮は望んでいる。

式部卿宮の、さばかり天の下は、人の国世界までも、優れたらん人を
求めいださんとおぼし、かからぬ隅なめるに、…… (三七一頁)

とある箇所は、式部卿宮が本質的に中納言と等しいことを示している。た
だ式部卿宮が理想の美女と出合えなかったのは、彼が当帝のたった一人の
男児であり、高い身分ゆえの行動制約があったからであるにすぎない。

〈天の岩屋 II アメノイワト〉の話に戻ることにする。他の容器(天の岩
屋)の中に閉じ籠もっている(あるいは閉じ込められている)美女(アマ
テラス)を奪い去ることで、理想的な状況が出現するのである。これは、
中納言に手厚く庇護されている吉野姫を式部卿宮が略取することの象徴表
現であるにほかならない。神話(天の岩屋)の引用が、『浜松』作者の構想
の実現に大きく寄与しているのである。

ところで、他の容器から中身であるところの如意宝を奪うのは、中納言の人生方針でもあった。彼は、式部卿宮と結婚すべかりし大姫を強引に愛して、自分のものにした。そして、唐帝の寵愛する河陽県の後(唐后)とわりなく契り、一児を出産させた。式部卿宮と中納言は、好一对のライバルであり、あらゆる面で競い合うことになるのである。それが、女性関係での競争になり、吉野姫をめぐる三角関係へと発展したのだった。『源氏物語』第一部における光源氏と頭中将の競争と似ているところがある。

しかし、式部卿宮にとって気がかりな点が一つある。それは、わりなく他の容器から奪取してきた美女を有する中納言が、そのうちの誰一人として自由にできないという事実である。大姫(尼姫)には出家され、唐后とは海を隔て、吉野姫とは三年間交會することが許されない。同様の運命は、美女を手中にした式部卿宮をも襲うであろう。彼は、せつかく手にした吉野姫との愛を貫くことはできないのである。

さて、二人の会話の中に、

(三七四頁)

をののしぐれのやどならんかし。
 という箇所がある。これは、何らかの物語を引用しているのだろうか。散逸物語の『しぐれ』も、小野を舞台とするという(『風葉集』)。又『海人の刈藻』巻一にも、小野の「しぐれ」が契機となつて男女関係が成立する箇所がある。これらと関連するのだろうか。又、『しぐれの縁』は、清水を舞台とするものだが、『浜松』の巻四から巻五にかけて、清水における式部卿宮と吉野姫の關係発生が語られる。『しぐれの縁』と、この「をののしぐれの宿」は、何かしら關係があるのかもしれない。

6・23 中納言、式部卿宮を警戒する 中納言は、式部卿宮の決心を打ち明けられて以来、彼が吉野姫に接近してくることを極度に警戒する。

「この宮(式部卿宮)はしも、このわたりにかならずたづね寄り給はんものぞ。一目も見たてまつり、わりなき御文も一度通ひぬる人、かならずすくい給はず、人の心あやしきまでなびかひ給へるくせおはする人なれば、ききだにつけ給ひなば、すべてうたがひあるべき事もあらずかし」

(三七六頁)

中納言が吉野姫に語るこの言葉は、『落窪物語』で少将が落窪姫君に、交野の少将について語った言葉と非常によく似ている。

(交野の少将の)文だに持て来初めなば、限りぞ。かれは、いとあやしき人の癖にて、文一くだりやりつるが、はづるるやうなれば、人の妻、帝の御妻も持たるぞかし。さて身いたづらになりたるやうなるぞかし。(巻一)

式部卿宮は、『落窪』の交野の少将や『源氏』の匂宮の系譜を引く好色者なのである。手紙(如意宝)を武器に、彼らは女心をたぶらかすのである。その手紙の中には、真心の籠もつた文面(和歌)が切々と記されているのである。ちなみに、彼らの用いる如意宝を「文」から若干変更すると、『隠れ蓑』の話が発生してくる。隠れ蓑を用いる恋の話は、如意宝を素材としている点で(「名文・名歌」の話と類縁關係を有するのである)。

中納言が心配している矢先、式部卿宮の手紙がどこからともなく届けられる。

(吉野姫は)そばみなどもせず、言ひしらすうつくしげなるねくたれ髪、言はんかたなきを、うちかたぶきて(式部卿宮からの手紙を)後目に見おこせ給へり。(三七七頁)

この箇所は、式部卿宮と吉野姫の「契り」を示すものであろう。(少し)ではあるが、吉野姫は手紙を「見た」。ここには、わずかな期間ではあるが二人の間に関係が発生する未来が、予言されているのかもしれない。

わずかな期間の愛にも、さまざまパターンがある。中納言と唐后の愛は、その双方からあととまで懐かしく回想された。ところが、吉野姫は式部卿宮と暮らした日々のことを忘れようとする。対照的なのである。中納言と式部卿宮との違いと言つてしまえば、それまでである。『浜松』は、あくまで中納言を中心にして組み立てられた世界なのである。

6・24 中納言と召入 愛する女性達(唐后・尼姫・吉野姫)と關係しえない中納言は、召人を相手にすることで心を紛らわすのだった。宇治十帖の薫と同じようなものである。

ここかしこも、すずろなるみづむまやにて通ひわたり給ひ、さべいひ

(三七八頁)

まには大貳のむすめにも忍びて絶えず、……
 「水駅」は、男踏歌の途中のちよつとした立ち寄り場所の意で、『源氏物語』の初音卷・真木柱卷・竹河卷などに用例がある。特殊な言葉であるから、『浜松』の作者も『源氏』によつてこの言葉を知つたのであろう。それを、「ちよつとした慰め用の女性」の意に拡大解釈したのである。召人、大貳の娘、その他無数の女達と接することで、中納言は心が慰められるどころか、一層心を苦しめたであろう。中納言とは、そういう人物なのである。一人一人の女性と交わることで、いくつもいくつも「絆」を抱え込むことになってしまうのだ。

6・25 唐后死去の知らせ、天より響く 中納言は、しきりに唐后の夢を見るようになった。

正月十日余日のころより、河陽県の後(＝唐后)、つゆもまどろめば、いみじうなやみわづらひ給ふとのみ見えつつ、おそはれおそはれして、常よりも面影に見え給ひつつ、…… (三七九頁)

唐后の思いが「夢」となつて、日本と中国の大きな境界線を飛び越したのである。あるいは、唐后の死は寿命が尽きてのちの死ではなく、自ら進んで死期を早めた結果であるかもしれない。現世でのかけがえのない生を自発的に放棄することで、唐后は来世での幸福を祈つたのかもしれないのだ。

中納言にとつて気がかりな日々が、二箇月ほどつづいた。そして、三月十六日の夜に異変が起きたのである。

三月十六日の月、いみじうかすみおもしろきに、端近うすだれまき上げて、みよしのの君(＝吉野姫君)とながめ出で給ひて、こよひのとぞかし、山陰の夢はと思ひ出づるに、「雲井の外のとたまひし(唐后)の御けはひ、今も聞くやうにおぼえて、

(中納言) 見し夢はあはれこよひの月のみぞそのをり知れるかたみなりける

うち泣き給ひて、添へ給へりし琴を掻きならしつづながむれば、…… (三七九頁)

中納言は、「三月十六日」に当たつて切実に唐后のことを思い出す。その日が、初めて(そして最後に)唐后と契りを交わした記念の日だからである。そして、中納言の眼前には、唐后(祖型)をしのぶためのよすが(反復)が多数存在している。あの日空にかかつていたのと同じような月、唐后の異父妹であるところの吉野姫、あの時流れていた琵琶を思わせる琴、そして唐后の子供である若君。日本における現実が、すべて唐における山陰での一夜の再現であり反復であると、中納言には意識された。その時、天変が生じた。

空に声のかぎりきこえて、「河陽県の後、今ぞこの世の縁尽きて、天にむまれたまひぬる」ときこゆ。(中略)さださだと三度同じ声にきこゆるほど、若君おびえて、例ならずいみじう泣き給ふに、…… (三七九頁)

この天の声は、本来ならば中納言(及び、唐后の子である若君)にのみ聞こえたともありたいところである。実際にはその他の人々にも聞こえたようだが、中納言と若君にのみ(唐后の妹である吉野姫を含めてもよい)意味を持つ言葉だからである。

唐后は、死んだ。死んで、天上世界へと転生した。中納言は、永遠に彼女と再会しないのではないかという絶望に打ちひしがれる。しかし、そのどん底から光明が射し込んでくることになる。唐后に、中納言(愛人)や若君(子供)や吉野姫(妹)などに対する親愛の情(執着心)が少しでも残っている限り、彼女は極楽世界へは往生できないはずである。彼女は、遠からず人間世界に転生してくるに違いない。

唐后の死によつて、吉野姫の胎内に唐后が転生した女兒が宿るという構想が実現可能となつた。吉野姫の懐妊が待たれるところである。それが、式部卿宮による吉野姫奪取を生じさせることになるのだ。『浜松』の作者の筆は、このあたり非常に冴えている。読者には、吉野姫の「宿世」運命がしつかりと見えている。しかし、吉野姫は全くそれを知らない。前もつて決定済みのレールの上を、それが喜びをもたらすこととも知らずに苦しみながら吉野姫は生きてゆく。運命と吉野姫の関係は、「話型」と「表現」

の関係とも似ているように私は思うが、どうであろうか。

6・26 式部卿宮、吉野姫を思う 物語は、式部卿宮と吉野姫の関係成立に向かつて一気に走り出す。いつ、どこで、どのようにして関係が発生するのかに、読者の興味は注がれる。

徐々に中納言の吉野姫への愛情が世の人々に知られるようになり、式部卿宮もその噂を聞きつけた(三八六頁)。その式部卿宮の正直な心中は、

めでたき人(吉野姫)はさしおかれて、尼姫君のゆかしき心は立ち
まさりぬるぞ、一方ならず色めかしき御心なるや。(三八八頁)

と語られている。この段階で、式部卿宮は全身的に吉野姫を愛しているわけではないのだ。自分と結婚する蓋然性の高かった尼姫(大姫)を失ったことを今でも口惜しく思っている。尼姫への下心があるのだ。尼姫を一目でもよいから自分の目で見てみたいのだが、中納言の警護が厳しいので、せめてこの吉野姫を得たく思ったのだ。実は、この時、式部卿宮は清水で初めて吉野姫を見ているのである。式部卿宮は、尼姫(失われた祖型)のイメージと眼前の吉野姫(反復)とを重ね合わせているのである。式部卿宮の愛も、一種の「ゆかり」の手法のうえに立脚していたのだ。

式部卿宮は、実際に吉野姫を見るまで、こっそりとそのあたりを覗いていたのだ。彼のことを、「影につきたるやうにて、たづねきき案内する人」(三八七頁)と規定する箇所も存在する。本体に対する影のように、吉野姫のあたりに徘徊していたのである。「隠れ蓑」を使ってこっそり姫君に接近する好色者、というパターンに近い。

宮と吉野姫の関係は、宇治十帖の雰囲気という点では、「匂宮——浮舟」と似ているが、そのほかにも何となく「柏木——女三の宮」とも似ているようである。特に、二人の間に子供ができたという点では、「柏木——女三の宮」関係を想起させるところがある。

6・27 吉野姫、清水寺に詣でる 吉野姫が「わらははやみ」にかかったのだ、中納言は彼女を清水寺に参籠させて平癒を祈願した(三八七頁)。中納言の心配は、

この人(吉野姫)のくるしげさを、我が身に代へばや。

(三八七頁)

というもので、泰山府君の祭り(我が身の生命と交換して他人の生命の永続を願うパターン)と共通するものである。中納言の吉野姫への愛を示すと共に、吉野姫の病が重大で彼女が死と直面していることを語るものである。

「わらははやみ」と言えば、『源氏物語』の若紫巻が想起される。「わらははやみ」は光源氏のイニシエーションと密接に関わっていたのであり、この期間を経過することで彼は紫の上という女性を獲得することができたのだ。くわしくは、拙稿「源氏物語における病とその機能」(『むらさき』第十八輯・昭56・7)を参照されたい。

「わらははやみ」という病は、吉野姫にとっても人生の移行期間だった。「少女」から「大人」へのイニシエートである。つまり彼女は「わらははやみ」によって清水寺に籠もり、そこで式部卿宮に拉致された。そして、宮の子供を胎内に宿すことになる。「少女」から「母親」への移行期間が、この病によって開始するのである。「わらははやみ」は、「懐妊」という広義の病を物語に導入し、吉野姫を少女と母親の境界線上に立たせることになったのだ。更に物語を先取りしておく、吉野姫は出産後に死去することになると考えられる。そうすると、彼女は「へ生」と「へ死」、「へ現世」と「へ来世」との境界線上にも位置することになる。病は、確かに吉野姫の人生を激動させる出発点になっているのである。

「わらははやみ」は、「懐妊」の序章であった。ふつう、女性は出産によってそれなりのイニシエートをするものである。宇治十帖の中の君も、移り気な匂宮との愛にさんざん苦しんだものの、匂宮の子供を出産することで匂宮の妻としての安定を獲得することができたのだ。一般的にも、女性の出産は、夫婦生活の安定(子はかすがい)、母としての精神的な強さの獲得、家刀自としての資格獲得など人生の好転をもたらすと考えられる。

しかし、吉野姫はそうではなかった。彼女は、式部卿宮の妻として安定するのではなく(もしそうならば、将来は帝の妻となることも可能だった)、あっけなく死去してしまうのである。パターンをあえて逸脱して、作者は

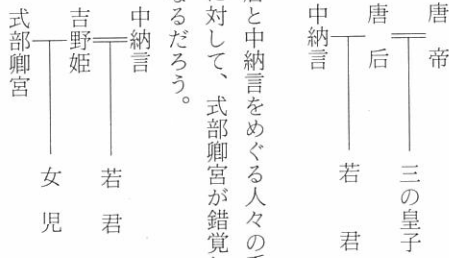
吉野姫の人生を紡ぎ出してゆく。それは、結局は別のパターン（例えば、白鳥処女型や海人型）に依拠することではあるのだが。

6・28 式部卿宮、吉野姫と若君を見る 6・26と話が前後することになるが、宮が清水寺で吉野姫を垣間見た時、若君（中納言と唐后との間の子供）も一緒だった。

若君の「母」など（吉野姫を）呼びむつれ給ふを、（式部卿宮は）「いみじういまだあやかなりと見ゆれど、子などありけるは、（彼女と中納言は）今始めたる中にはあらざりけり」と心得給ふに、……

（三八八頁）

式部卿宮は、この若君を、中納言と吉野姫との間の子供だと錯覚したのである。この錯覚には、ある種の必然性があったと考えられる。式部卿宮による吉野姫奪取は、かつての中納言による大姫（尼姫）奪取の反復だと考えられるのだが、それは同時に、中納言による唐后との密通の反復でもあったのではあるまいか。



唐后と中納言をめぐる人々の系図は、右のようにまとめられるであろう。それに対して、式部卿宮が錯覚した結果できあがった人間関係は、次のようになるだろう。

中納言は、かつての唐帝の立場（妻に密通される男）に立たされているのだ。むろん、中納言は吉野姫と夫婦関係を結んではいない。若君も、彼

と吉野姫の間の子供ではない。けれども、式部卿宮と読者の脳裏においては、唐での出来事が再現されているのである。中納言は、若菜下巻の光源氏（自分の犯した過去の密通をかみしめる立場の男性）と同じような状況にあると言えよう。

一方、吉野姫がかつての〈唐后〉と同じ立場にあることも容易に理解できるだろう。彼女は式部卿宮の子供を産むことで、中納言をめぐる三角関係に苦しむことになる。これは、唐后が中納言の子を懐妊することで唐帝に対してすまなく思うことの反復である。唐后の〈祖型〉が、今清水寺で〈反復〉されようとしている。吉野姫は、唐后の苦悩を自分のものとしようとしているのだ。そのあかつきに、唐后と吉野姫とが精神的肉体的に同一化し、やがて吉野姫の胎内から唐后の転生した女兒が産み落とされることになるのである。

式部卿宮が若君を吉野姫の子供だと錯覚したことには、構造上大きな意味があると、私は考えたい。

6・29 式部卿宮の決意 式部卿宮は、隙を盗んで吉野姫を奪取しようと思う。

（三八八頁）

かくてある程に、盗み隠してん。
式部卿宮、例のいとあながちなるさまにかまへて、こよひかならず率て隠してんとおぼしておはしましぬめり。

（三九〇頁）

このパターンも、本来は〈奥山から美女を発見し都の自邸に引き取る〉というものであるはずである。しかし、〈奥山〉という要素も不足し、〈高僧＝奥山の聖者〉という要素にも欠ける。〈清水寺〉での出来事なので、底流には〈山〉と〈僧〉が存在しないではない。けれども、理想的聖者に指導される男女ではありえないわけで、この点にも式部卿宮と吉野姫の関係の非理想性が感じられる。二人は、それなりの契りしかなかったのである。あるいは、式部卿宮がたびたび尼姫のことを思っているのも、吉野姫との契りの薄さを意味しているのかもしれない。

6・30 卷末表現 卷四の最後の一文は、
いかならんとぞ。

（三九〇頁）

というものである。式部卿宮が中納言に知られずに吉野姫を略取すること
を強く示唆する文章である。具体的な場面を語らずに、巻が変わってみる
と男女が結ばれているというのは、『源氏物語』の藤袴巻と真木柱巻の間で
鬚黒が玉鬘を掌中にしていたことと似ている。効果的な幕切れであると言
えよう。

7 巻五を読む

7・1 中納言の不安 巻五は、中納言の視点から始まる。式部卿宮や吉
野姫(当事者)ではなく、中納言(傍観者)の視点から吉野姫の失踪を語
るのは、実に巧みな手法である。

いつとてもこの人(吉野姫)のなめに目とどめられぬ折はなきな
かにも、いとこころほそげに見おくり給へりつる^{おもひ}俤、目にかかり心に
しみて、(中納言は)胸うちさわざつ思ひ出でられ給へば、……
(三九二頁)

中納言は、清水に赴く際の吉野姫の心細げなようすが胸中を去らず、不
安を増幅させているのだった。『源氏物語』蜻蛉巻の冒頭付近に、浮舟を心
配する母親(中将の君)の手紙が記されている。

いとおぼつかなきにまじろまればらぬげにや、今宵は夢にだにうち
とけても見えず、ものにおそはれつつ、心地も例ならずうたてはべる
を、なほいと恐ろしく。

『浜松』の中納言は、吉野姫の愛人でもあり、後見者なのでもある。後
見者としての不安が、例えば浮舟の母などと共通しているのだ。『源氏』も、
浮舟巻と蜻蛉巻との間で、浮舟失踪が省略的に表現されているのだった。
中納言の愛人としての不安の方は、例えば浮舟の失踪を不審に思う薫の心
情などと共通することになる。巻五巻頭の中納言像は、浮舟の母と薫を
足して二で割ったような感じなのである。

ちなみに、『浜松』では、物語内の時間は、逆行したり溯行したりするこ
とがほとんどないのだが、この部分は珍しくも時間が逆行している。巻四
巻末の時間と巻五の時間が一致するのは(巻五が巻四に追いつくのは)、視

点が式部卿宮に戻る四〇四頁あたりである。散逸首巻と巻一の間にも同様
の箇所があったのだが(3・17参照)、作者としてはかなり思い切った手法
と言つてよいであろう。

7・2 吉野姫の失踪と中納言の推測 夜通しまんじりともできなかった
中納言は、ひそかに清水寺に赴いた。そして、泣き沈む女房達の口から、
吉野姫失踪の事実を聞かされたのだった。

この人々(ここにいる女房達)の中に、知らであるべきにあらず。
(三九二頁)

というのが、中納言の第一印象だった。誰か女房が手引きしないことには、
姫君と関係を結んだり盗み出ししたりすることができはるはずがない。

そして、女房をたよって吉野姫に接近したであろう具体的男性名を、中
納言はあれこれ詮索するのだった。

式部卿宮、関白殿の君達にこそあらめ。それよりほかは思ひよらじ。
(三九三頁)

(中将の乳母)「小中将の君とて、今まるれる人の、わかうかたち清き
がもとになん、おほいどのの三位中将の御文とて、ことねり常にまう
でくとときき侍りし。清水の後、其人もわづらふ事ありて久しくまゐら
ぬに、さやうの人のしわざにや」
(三九四〜三九五頁)

三位の中将をのみこそ思ひうたがひつれ。
(四一六頁)

式部卿宮も、吉野姫にひそかに手紙をつかわしたことがあったが(6・
23参照)、宮は吉野姫に仕える女房の中に、強力な影響力を發揮できる人物
をしのび込ませていたのだろう。このあたりは、『源氏』における玉鬘求婚
譚と似ている。美女のもとに、世の中を代表する貴公子達からの「文」が
集まり、ある女房の手引きで姫君が男性の手に落ちることになるのである。

中納言は、吉野姫を略取した男性の名前を特定することができずに、苦
しんでいる。吉野姫は、どこへともなく消えてしまった。最愛の女性が、
別にどこが悪いということはないのに原因不明の病気にかかりあつけなく
死んでしまうようなものだ。そういう退場の仕方が、男を一番苦しませる
のである。

7・3 中納言の嘆き 中納言は、吉野姫失踪の原因がわからないでいる。現在の混乱した状況の原因がわからないのは、現在の自分が恋で苦悩する理由がわかっていないことの反復である。そして、中納言は迷いの霧の中で、現在を作り出した過去(前世)の姿を知ろうとしている。自分の人生の〈祖型〉を探索しているのである。

このひと・ゆかりに(唐后の血族に)かうのみいみじく心をみだり嘆きわぶべき契りのありけるも、かつはうらめしう思し知られて、

なにことを我嘆くらんかげろふのほのめくよりもつねならぬよに
(三九五頁)

この箇所は、宇治十帖の蜻蛉巻を享受しているであろう。薫も、大君のゆかりによつて混乱した気持ちに陥つてしまつてゐる。

何ごとにつけても、ただかの一・つ・ゆかりをぞ思ひ出でたまひける。あやしうつらかりける契りどもを、つくづくと思ひつづけながめたまふ夕暮、蜻蛉のものはかなげに飛びちがふを、

(薫)ありと見て手にはとられず見ればまたゆくへも知らず消えしかげろふ。
し・か・げ・ろ・ふ

へひとつゆかりゆえの悲しみの連鎖反応、およびへかげろふに寄せる詠嘆歌の存在が、『浜松』と『蜻蛉巻』とで共通しているのである。

なお、『浜松』の「なにごとを…」の歌は、『続古今和歌集』に、「だいしらず・菅原孝標朝臣女」として入集している(巻十六・哀傷・新編国歌大観番号一三九〇)。中納言は吉野姫の死去を確信しているわけではないが、

『続古今』の撰者は吉野姫への挽歌だと理解しているのである。
7・4 中納言と大貳の娘 7・3で引用した「なにごとを…」の和歌に引きつづいて、物語は中納言と大貳の娘の関係を記す。

かくのみ(吉野姫問題で)思し乱るるにまぎれて、(中納言は)大貳の娘もかき絶えおとづれやり給はぬを、かしこには、しはずばかりりただならぬさまになやましきも、人はかけても思ひかくべきやうもなきを、心ひとつには思ひよせらるる方ふかきに、……(三九六頁)

大貳の娘は、懐妊した。そして、母親としての本能で、生まれてくる子

供の父親が中納言であること(夫の衛門督の子供ではないこと)を知つたのである。またしても、中納言は正式の結婚によらない子供を作つてしまつた。尼姫の子、唐后の子につづいて三人目である。後の方に、

大貳の娘、おどろおどろしくわづらふ事なくて、をのこごうみたりとて、……
(四〇三頁)

とあるから、生まれたのは男児だつたことがわかる。中納言は、吉野姫を式部卿宮に盗まれ、その胎内に子種を宿せられる。この時点では式部卿宮の存在は判明していないのだが、もうすぐ明らかになることである。女を盗まれ子供まで孕まれた者が、その一方では、他人の妻を盗み子供を産ませていたということのおかしさ、空しさを、私達は味わうべきであろう。

中納言は、かなり戯画化されている。

しかし、中納言は大貳の娘の懐妊をも知らない。そして、二人は歌を贈答する。

(中納言) ささがにのいかになりゆく我が身とてありやなしやと問ふ
ひとのなき
(大貳の娘) 言にいでていかにいかにといはねども蜘蛛手に思ひやら
ぬ世はなし
(三九六頁)

ここには、『伊勢物語』九段が引用されている。八橋の「蜘蛛手」と、都鳥の「わが思ふ人はありやなしやと」とが、踏まえられているのである。その『伊勢』九段の表現の背後には、在原業平が清和天皇の後である二条の后と密通して罪の子を作るといふ伝承が存在しているのだつた。大貳の娘は天皇の后のように高貴な身分ではないものの、〈密通〉と〈罪の子〉という要素は存在する。『浜松』における『伊勢』九段の引用は、話型的必然だつたのである。

7・5 中納言の宿世 中納言は、ものまぎれに大貳の娘と対面する。そして、

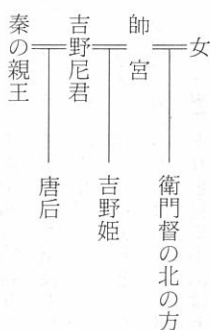
この世には久しうあるまじき夢を見しに、いとど心ほそくおぼえしかば、……
(三九七頁)

と語る。この〈夢〉は、最近見た夢なのだろうか、それともかなり以前に見

たことがある夢なのだろうか。私は、前者の方を取りたい。中納言は、何度も何度も予言されたり夢を見たりして、自分の宿世（二十四五歳における死）を知り抜いている。それを忘れそうになると、また別の新しい夢のお告げがもたらされるのである。

さて、この時大武の娘は中納言の子を身ごもっていたのだが、彼女のふくらかやわらいでいるようすを見て、ふと吉野姫のことを中納言は思い出した（三九六～三九七頁）。これは、吉野姫がまもなく懐妊し、その懐妊した姿を中納言が見ることになる未来を暗示するものである。大武の娘のエピソードが、吉野姫の物語の内部に挿入されている理由は、おそらくこのあたりに秘密があるのではなからうか。

7・6 中納言、衛門督の北の方を見る 中納言が秘密の関係を持つている大武の娘は衛門督の後妻なのだったが、衛門督には本妻がいた。この本妻が、帥宮の娘であり、唐后や吉野姫と関係がないこともなかったのである。系図は次のようになる。



衛門督の本妻（北の方）は、吉野姫の異母姉なのである。吉野尼君を介して、唐后とつながっていないこともない。中納言は、

さても是は帥の宮の御むすめなれば、この行方しらぬ（吉野姫の）おなじたぐひにこそはあらめ。 （三九八頁）

という思惑から、北の方を垣間見てみようと思ったのだった。北の方の中に、吉野姫的なものを発見して、心を慰めようとしたのである。しかし、その結果は、

思ひよそへよりたる人（吉野姫）の御倅に、たとしへなうつゆばかり通ひたる所なかりけり。 （三九八～三九九頁）

というありさまだった。唐后と吉野姫は、異父姉妹だが、容貌にはかなり通うところがあった。吉野姫と衛門督北の方は、異母姉妹だが、容貌は全くと言ってよいほど似ていなかった。唐后と吉野姫が似ていたのは、共通の母親（祖型）として吉野尼君が存在していたからだだろう。〈母と娘〉の絆の強さが『浜松』の潮流の一つである。ちなみに、男性の場合には〈父と息子〉の絆が強いようである（2・1参照）。吉野姫と衛門督北の方は、父を共有しているのだが母を異にしているために、ほとんど絆が不明瞭だったわけである。けれども、吉野姫の〈ゆかり〉であるがゆえに、中納言は北の方をすこしは懐かしく思うのだった。

むらさきの色に通はぬ草なれどなほ一本のなつかしきかな

（三九九頁）

中納言は唐で三の皇子と対面した時に、生前の父親と容貌はまるで違っていたものの〈血の絆〉を嗅ぎ取って懐かしんだものだった。それと少し状況が似ているようである。

7・7 中納言、吉野姫の手習を見る 衛門督の本妻によって、吉野姫や唐后をしのぶ気持ちの中納言の心の中でのいよいよ高まっていった。

かの世（唐の唐后）はさる事にて、いふかひなき事も、この世（日本の吉野姫）に行方なく思ひまどふ事の恋ひしさもおぼつかなきも、たぐひなうおぼさるるままに、…… （三九九頁）

吉野姫の失踪（中納言が吉野姫を失ったこと）は、中納言と唐后が住む世界を隔ててしまったことの反復表現でもあるのだ。唐における〈祖型〉が、今日本で〈反復〉されたのである。

ということは、吉野姫がもし中納言の許に帰ってくるとしたならば、中納言と唐后との距離もまた埋められるのである。今度は、吉野姫が〈祖型〉となつて、唐后が〈反復〉に該当することになる。吉野姫（母親||祖型）が唐后の転生した女兒（娘||祖型の反復）を産出し、中納言は唐后と再会するのだ。吉野姫と唐后の運命は、密接に絡み合っている。

中納言は、失踪した吉野姫がかつて使っていた道具類を見てみた。すると、姫の手習歌がいくつか発見されたのだった。

はるかにも思ひやるかなみよし野の山ぢの雪も今は消ゆらむ

うき世なりあらじとなどて思ひけん心とどまる折もありけり

鳥部野の煙とならん雲るにも君を心にいつかわすれん

(四〇〇〜四〇一頁)

女性の失踪後(あるいは死後)に、自分の運命を予言するかのような手習の歌が発見される、というパターンに属するものである。吉野姫の歌は、「消ゆ」とか「煙になる」とかの不吉な言葉を用いたものだった。その一方で、現世への執着(「うき世なり」の歌)や中納言へのほのかな慕情(「鳥部野の」の歌)をも漂わせていて、発見した中納言の涙を誘ったのだった。『更級日記』に、藤原行成女が死去したあとで、「鳥部山：」という和歌の筆跡が作者の涙を誘った、という記述がある。もし、『更級』と『浜松』が同一作者だとすれば、無意識のうちに状況設定が類似してしまったということであろう。

7・8 中納言、唐後の転生の夢を見る 中納言が「霜の後の夢」という『和漢朗詠集』所載の詩句を口誦さんだあとまどろむと、夢の中に唐后があらわれた。

「霜の後の夢」は、王昭君の故事を詠んだものである。胡地へ去っていった美女をもう一度呼びもどしたがった帝の気持ちの主眼となっている。つまり、去っていった白鳥処女の再来を強く願う心情が主題なのである。この漢詩句の引用が、唐後の転生(別離していた愛する女性との再会)をもたらしことになる。

唐后は、夢の中で自分の来世を語った。

身をかへても一つ世にあらん事いのり思す心にひかれて、今しばしありぬべかりし命つきて、天にしばしありつれど、我もふかくあはれと思ひ聞えしば、かうおぼし嘆くめる人(吉野姫)の御はらになんやどりぬる也。薬王品をいみじうたもちたりしかども、我も人も浅からぬあいなき思ひにひかれて、なほ女の身となん生まるべき。

(四〇二頁)

この霊夢に際しても、夢の真実味を裏づけるような物質は用いられていない。『浜松』の唯心主義的性格をうかがわせるものである。夢ほど、確実なコミュニケーションの手段はないのだ。

さて、唐后は天上に転生していたはずなのに(6・25参照)、どうして更に転生して日本に出現することになったのだろうか。その心中には、複雑なものがあつたと思われる。まず、夢のお告げの語り出しを見てみると、「(私と)身をかへても一つ世にあらん事いのり思す(中納言の)心にひかれて」とある。じぶんと再会したいと切に祈っている中納言の心にほだされて、転生を決意したというのである。中納言が唐后ゆえに愛執の罪に陥っているのを唐后が知り(唐后のゆかりゆえに愛した吉野姫を喪失した中納言の苦悩を察知して)、その愛執の罪を晴らしてあげるべく中納言の前に出現することにした、というのである。天上から地上へ転生するのは、夢浮橋巻の浮舟が「薰の愛執の罪を晴らすために」(『横川の僧都のアドバイスの内容』還俗して、濁り多き世俗生活を再開するようなものだ。そして浮舟の還俗が可能性としてはきわめて高いものの物語内では実現していない)と対応するかのように、唐後の転生も『浜松』巻五ではまだ完了していない。しかし、確実に男女の再会が語られようとしているのである。

唐后は、中納言を救済してやるためにのみ転生してくるのではなかった。「我もふかく(中納言を)あはれと思ひ聞えしかば」とあるように、唐后の側にも中納言に対する愛着・愛執が残っていたのである。唐后は、転生によって再会することで、他者の執着のみならず自分の執着をも消そうとしている。それが、お告げの最後の部分の「我も人も浅からぬあいなき思ひにひかれて」という箇所に反影しているのである。

唐后は、中納言を救済することで自分を救済することを求めている。中納言の方にも、唐后を救済することでしか自分自身を救済する方法は存在しないのだ。このような「救済の相互性」(「救済さるべき救済者」を男女一人ずつ造型して互いに関係させることは、何度か言うように夢浮橋巻における横川の僧都の思想なのであつた。(浮舟還俗に踏みきれない紫式部においては、もう少しで生まれ落ちそうな思想)。

ところが、『浜松』の作者は、人間の執着心を解消させることに、ぎりぎりのところで反対する。彼(ないし彼女)は、転生による再会を一瞬のものとするので、登場人物の愛執の罪を一層拡大しようと試みるのである。作者自身が、どうにもならぬ(愛執の絆)に苦しみぬいている現実を示しているであろうか。中納言は現在二十歳前後であり(たぶん二十一、二歳)、二十四、五歳における死去がかなりの確率で推測できる。転生してきた唐后と、中納言は三年間しか共に暮らすことができないのである。そう言えば、中納言の父親は転生して子供との再会を祈ったのだったが、その場合も再会は三年間だけだった(中納言の在唐期間)。中納言は、三年しか唐后を見ることができず、三歳の女兒と契することは不可能だから、いよいよ愛執の煩惱を掻き立てて更なる転生を繰り返すことになってゆく。あるいは、こうとも言える。中納言は、自らの生命・寿命・あるべき栄華を自発的に放棄しているのである。寿命の短かさの肯定は、かけがえのないものの能動的放棄とほぼ等しいのだ。中納言は、自分の寿命をあと三年間にちぢめることで(二十四、五歳の死を自分の運命として心の底から納得すること)初めて、唐后と再会しえたのである。なお、唐后の方も、唐におけるあるべき寿命を放棄し、天上での無上の楽しみを放棄してまで、中納言と再会しようとしたのだった。中納言と唐后は、同じような人生を生きることで、むしろそれゆえにこそすれちがいつづけるのである。

ちなみに、中納言が唐后の夢を見ている時点において、吉野姫は唐后の転生である女兒を胎内に宿したに違いない。式部卿宮と吉野姫との実質的な(一夜のみ)が、この瞬間になされたとは私は解したいのである。神の生まれ変わりである申し子を人間が授かる際には、男女の当事者のいずれかが神のお告げを聞いたり、夢の中で何らかの如意宝を授かったりするものである。『浜松』のこの場面では、契りを交わす男女ではなく第三者の中納言の夢でお告げがなされるわけで、面白い(話型の変容)が施されている。

7・9 式部卿宮に視点が行く 唐后の転生が確実なものとなり、吉野姫の失踪(式部卿宮による吉野姫奪取)の意味が明らかとなったところで、物語内の時間が溯行して巻四の巻末と接続することになる。吉野姫は、中

納言以外の男性との間に子供を作る必要があったのである。そうせねば、中納言と唐后(転生してくる唐后)は親子になってしまい、最初から男女関係成立の可能性がなくなってしまう。

なお、式部卿宮に関しては、

さて式部卿宮は東宮うせ給ひぬれば、うたがひなき儲の君に定まり給ふべきを…… (四〇四頁)

と述べられている。現東宮が死去したので、当帝のただ一人の男宮である式部卿宮の立太子の可能性が高まってきたのである。死去した東宮は先帝の第二皇子であり、当帝の弟であり、中納言の伯父にあたる人物である。

先帝には三人の男宮がいたのだが、そのうちの第三皇子(故式部卿宮＝中納言の実父)がまず死去し、その次に第二皇子(東宮)が崩じた。先帝の第一皇子(当帝)の御世もそれほど残り多いものではあるまい。命短かき一族なのだが、その中の若い者から(年下の方から)順番に死去してゆくのは、ちよつと変わった趣向である。

式部卿宮(中納言の父とは別人、吉野姫を領略した人物)は、東宮に立っただけではなく、それほど遠くない未来に即位することが確実なのである。宇治十帖の匂宮よりも、即位の確率は高くなっている。式部卿宮の好色さは匂宮のイメージを受けついでものと想定されるのだが、王権への近さという点では式部卿宮の方が上なのである。

式部卿宮は、美しい女性が中納言と何かしらの関連があることしかわかっていない。正体不明の美女を、掌中に収めることに成功したのである。さばかりあるかなさかに思ひしづみたるうつくしさは、天女の天くだりたらんを見つけたらんよりもなほめづらしく、かぎりなくあさましきまで(宮は)おほざるるに…… (四〇六頁)

天女を得たという式部卿宮の喜びは、羽衣伝承(白鳥処女説話)を踏まえているのであろう。あるいは、かぐや姫を得た竹取翁の喜びを引用しているのかもしれない。吉野姫は、中納言によってかぐや姫に喩えられていた(6・21参照)。白鳥処女型の話型引用は、女(吉野姫)が遠からず男(式部卿宮)の許を去ってしまう未来を先取りするものなのであろう。

未来の喪失よりも、現在の獲得に話を戻す。清水寺で男女が出合い結ばれるのは『しぐれの縁』などのパターンであり、御伽草子の『物臭太郎』も清水における強引な男性の求愛を描いている。子供に恵まれない夫婦が清水で子宝を授かるように、理想の美女を求めめる式部卿宮は清水で吉野姫（如意宝）を授かったのである。その吉野姫をいつまでも手許に置いておけるかどうかは、式部卿宮の力量（度量）次第なのだ。

美女を得た式部卿宮は、彼女の正体を知りたくてしようがない。（現在）自分の目の前に存在する謎の女性の〈過去〉を知りたいのだ。（過去）とは、現在を産み出し現在を支えている〈祖型〉のことである。私が本稿で追究してきたのは、〈表現〉を支える〈話型〉なのだが、それは〈現在〉を産み出した〈過去〉の詮索作業でもあったのである。さて、式部卿宮は次のように推論したのであった。

（吉野姫が）まだ世になれぬけしきを、「いなや、こはいかなる事ぞ。いもうとなど放ちては、かばかりの人を我が手にかけて、朝夕むつびながら、気ちかう見なされぬことよ、仏聖といふとも、かたうこそあらめ。母などいひむつぶるちごなどのあるやうにこそきき見しか。いかなりけることぞ。

（四〇六頁）

盗み出す前に清水寺で見た女には、彼女を「母」と呼ぶ子供がいた。とすれば、彼女は中納言の愛人で、その子供は中納言の子であるに違いない。しかし、自分が実際に手にした美女は、まだ男を知らない処女であった。そのギャップに、式部卿宮は迷ったのである。式部卿宮にとっても、〈現在〉は矛盾し混乱している。式部卿宮は、一つの結論を下した。

うたがひなく中納言の思ふ人のほらからのありけるをたがへてける。

（四〇六頁）

自分が盗み出したのは、中納言の子を産んだ愛人ではなく、それとそっくりの顔をした別人の妹だったと思つたのである。この結論が誤りであることは、読者も知っている。しかし、現在に対して〈それなりの説明〉を発見した式部卿宮は、それによって安心することができた。そして、現在の女性に対して愛情が高まってゆくのを覚えたのである。私達は、式部卿

宮の錯覚を笑うことはできない。中納言が吉野姫（生身の女）の中に唐后（非在の女）を見つづけていることと、式部卿宮が吉野姫の中にその妹を見てとつたことは同じ発想方法なのである。そして、宮は、吉野姫の妹というどこにも存在しないはずの女性を、生身の女として愛している。式部卿宮はへんちがいの略奪婚を演じてしまったと思ひ込んでいるが、それによって女への愛が薄れるということは全くなかったのである。

愛人の妹だから中納言が手をつけていなかったのだからという式部卿宮の推測は、一人の男性が姉妹を同時に妻として所有することがないという常識に基づいている（大系四〇七頁の頭注一八参照）。この時代、兄妹婚や姉妹二人を同時に妻とすることがタブーとして意識されていたのである。しかし、〈タブー〉とは、理想的な形態の裏返しなのでもある。凡人にとつてのタブーを平然と破ることのできる人間が、祖型的（始原的）英雄なのである。その証拠に、姉妹を同時に妻とすることで英雄になつた人物の話は数多い。〈タブー〉の両義性を、忘れてはならないだろう。

中納言は、吉野姫と契ること、その姉（唐后）と契つた過去を反復することができると。しかし、聖の予言などによってそれを抑制しているのだ。それが中納言の律義さでもあり、限界なのでもある。

7・10 吉野姫の病、重くなる 式部卿宮に略取され、男女関係を持つた吉野姫は、いよいよ病勢がつつたのだ。前から患っていたへわらはやみ〴〵が悪化したというのではなく、〈懐妊〉という広い意味での病にかつたのである。そして、二十歳以前に男女関係を持つたら生命の危機が訪れるという吉野山の聖の予言が、実現に向かって始動し始めるのだ。

聖が、嘘（方便）を言っているということは、信じがたい。聖は唐后の転生まで知りぬいていて、吉野姫が中納言以外の男性の子供を宿すように、あと三年間吉野姫と契つてはならないと言ひ含めたとは、ちょっと考えがたいのである。もし方便だとすると、吉野姫は二十歳を過ぎても死なずに済む。しかし、物語は確実に吉野姫の死を暗示する。吉野山の聖の予言は、真実だったのである（物語のパターンとして、聖者は絶対に嘘をつかないものだ）。

(吉野姫が)つゆも湯などやうのものをだに見もいれ給はず、思ひしづむに、水の泡などのやうに消えいりぬべきを、(式部卿宮は)いとわびしくせんかたなくおぼしまどはれて…… (四〇七頁)

吉野姫は、仏典で無常の代名詞ともなっている「水の泡」のように、今にも消え入りそうになっている。「源氏物語」で、柏木の死が泡の消滅に喩えられていたことが、あるいは「浜松」の作者の念頭にあったのかもしれない。もう少しあとの箇所には、

雪などを水にいたらんやうに(吉野姫が)なるに…… (四一頁)

ともある。泡がはかなく消えるように、そして水に入れられた雪があつてなく融けてしまうように、吉野姫の生命の灯が今にも吹き消されようとしているのである。

病(懐妊)は、人間(女性)にとつてはイニシエーションである。未熟な段階から安定した段階への移行が、「死と再生」として語られるのだ。ところが、「浜松」作者の世界観や人生観には、「死と再生」という概念がないのだ。あるのは、「死と転生」だけなのである。そして、その転生たるや、人格の向上とは全く無縁なのだ。人間は、いつの世にあつても同じような悩みで苦しみ、苦悩を増幅させて次の世へと転生してゆく。

7・11 式部卿宮の悲嘆 式部卿宮は美女を手中にしたものの、彼女は病重く、誰か他の男(おそらく中納言)を恋しがってばかりいる。宮は、あやにくな人生とこの女との契りの薄さをかみしめる。

あまりなるわが心をくしとおぼす仏神のかかる目を見せ給ふにやあらん。 (四〇八頁)

この心中思惟は、宇治十帖における薫の心中と重なるものである。薫は、このような心境に何回立ち到ったことだろうか。「浜松」の式部卿宮は本質的に匂宮タイプに属するのであるが、一面で薫的な側面を有するのである。そもそも、自分の妻となるべきだった女性(尼姫)を中納言に奪われてしまったこと自体が、式部卿宮の薫的性格を示すものであった。

この人(吉野姫)いたづらになりなば、やがて我が身もあと絶えて野山にゆきまじるべきぞかし。国王の位もなにかはせん。

(四〇八頁)

もし、吉野姫の死去した悲しみによって式部卿宮が出家することになったとしたら、理想的である。「国王の位」というかけがえのない宝物を放棄することで、宮は真実の悟りに一步近づくことが可能になる。そうならば、まことの「仏の方便」であろう。しかし、実際にはそうはならない。式部卿宮は、立太子そして即位へと栄華の道を歩かせられるのである。

関白殿の姫君十月に御裳着ありて、(式部卿宮)新東宮にまゐらせ給ふべき事など天下はひびきいとなみたるに…… (四〇八頁)

宮は、権力者である関白の姫君を、第一夫人(東宮妃)として迎えることになったのである。宮は、この場面では宇治十帖の匂宮役を演じている。匂宮は中の君(宇治の山里から下りてきた美女)に執着する一方で、権力者夕霧の姫君を正妻として迎えざるをえなかったのだ。式部卿宮は、もはや生身の人間ではない。東宮としての「制度」の中に掬め捕られようとしているのだ。彼がすべてをすてて出家することはありえず、あるとしたら死かあるいは制度から捨てられる時だけである。彼には、吉野姫への純愛を貫くだけの力量がまだ備わっていないのだ。

ちなみに、式部卿宮は吉野姫を宮中の「梅壺」に隠し据えていたのだ(四〇四頁)。梅壺という空間の中に、男女二人の傷ついた貴種が収納されている。男は、女への愛を貫けなくて苦しんでいる。女は、病によって苦悩している。これは、「箱の中の取ついた二つの玉」という話型に属するものである。本来ならば、傷ついた二人の貴種は、互いに互いを救済しあうはずである(話型に内在する発展性)。しかし、「浜松」は女だけがこの容器の中から外へ出てゆき、男はとどまる、という結末を辿ることになった。吉野姫と式部卿宮は、相互救済という本来の展開を示さなかったのである。二人が一つの空間に閉じ籠もったのは、ただ吉野姫が「子供」を孕む必要性のためだけだったのである。

7・12 吉野姫、中納言の許へ帰りたく思う 困ってしまった式部卿宮が、姫に自分のことを誰に知らせてほしいかと尋ねると、姫はしばらくの躊躇ののちに、

中納言に告げさせ給へ。

(四一〇頁)

と、息の下で答えた。吉野姫なりの〈大きな旅〉が、ようやく終了しようとしている。清水寺参詣、病、懷妊、さすらい、苦しみ。それらを通して、吉野姫は再び中納言の許に戻ってゆくことになるのである。あるいは、吉野山を下りることによって開始した旅が、まもなく死によって完結しようとしていると言つてもよいであろう。

吉野姫のあるべき居場所(「ふるさと」)は、やはり中納言のところだつたのだ。後に彼女が中納言の庇護下に戻つた場面で、

ふるさとに立ち帰り、見なれし人々の中にて嘆きあつかはれ給ふに、
(吉野姫は) やうやう魂もしづまり、心もすこしなぐさみ給ふまに
(四二三頁)

とある。けれども、そこ(吉野姫の存在すべき場所)から逸脱して、式部卿宮の支配する空間・領域に入ること、中納言にプラスの結果をもたらしたのである。ふつうは、如意宝はあるべき場所にないと所有者にたたりを示すものである。中納言が、掌中の玉(吉野姫)を喪失すること、悲しんだのは、原則どおりのマイナス効果だつた。ところが、吉野姫は、唐后の転生した女兒を宿すという中納言にとつて好ましい結果をもたらしただのである。このプラス効果に関する限りは、話型の原型からの離脱と言えらるであろう。

なお、式部卿宮は、〈隣の爺〉の役割をも果たしている。宮(意地悪爺さん)は、むりやりに中納言(正直爺さん)の許から吉野姫(如意宝)を盗んだものの、如意宝は正当な所有者である中納言を慕い、中納言の許に戻つていったのである。〈孟嘗還珠〉の故事とも、少し似ている。吉野姫(如意宝)は、帰還に際して、以前よりもっと立派になつて(子宝という別の如意宝を持つて)帰つてきたのだつた。

この付近には、ちらほらと歌語が散見している。「草の原」(四一〇頁)は、『源氏物語』花宴巻に由来するもので、吉野姫の死に場所を中納言が発見しようとするという文脈の中で用いられている。「まがきの原」(四一二頁)も珍しい表現だから、あるいは歌語かもしれない。こちらの方は、姫

の本来の居場所の意味で使用されている。これらの歌語は、中納言と吉野姫を一つにつなげようとする働きを示しているような気がする。

7・13 中納言、吉野姫を引き取る 吉野姫から中納言の所へ帰りたいと告げられた式部卿宮は、改めて姫の素姓を疑うようになった。

「御身には、(中納言は)なにぞ。まろがためにようきき定めて(中納言に)告げんこそよからめ」
(四一一頁)

なにばかりのなからひにかあらん。
(四一一頁)

式部卿宮は、中納言の愛人の妹を奪取したと一度は思い込み、それによつて一応の安心を得ることができた。しかし、式部卿宮は、現在の真実が見えていないことに対する不安が、またもや頭をもたげてきたのである。宮は、自分の前世の姿が見えておらず(二相を悟つておらず)、現在の自分を産み出した前世からの〈宿世〉がわかつていない。かといって、〈宿世〉を告げてくれるような予言や霊夢とも無縁なのだろう。

さて、式部卿宮から連絡を受けた中納言は、吉野姫を引き取ることになつた。中納言の許から去つていった白鳥処女が、再び戻ってきたのである(逆白鳥処女型の話型)。その際、中納言は吉野姫の素姓を偽つて式部卿宮に語る。

唐の親王(＝中納言の父の転生)のこの世の事をかがみを見んやうに
のたまひしなかに、「上野の親王と言ひし人のむすめにいみじうしのび
て行き通ふやうありしほどに、はかなう形見とどめてき。女にてぞあ
らん。……」
(四一六頁)

唐の三の皇子は、前世を記憶している〈二相の人〉である(3・13参照)。その彼が前世(生前の日本での出来事)を回想した中に、上野宮の娘(＝吉野尼君)との間に一女を生じたということがあつたと、中納言は言いつくろつた。即ち、自分にとつての異母妹にあたるのが、この吉野姫だといふのである。前世での出来事が、虚構の産物として中納言によつて捏造された。偽りの〈祖型〉が、提示されたのである。吉野尼君と契つて吉野姫を産ませたのは、本当は中納言の父ではなく、帥宮だったのである。

しかし、中納言がでつちあげた〈偽りの祖型〉には、真実の部分も含ま

れていたのだ。吉野姫の母親が上野宮の娘である、という点は事実なのである。中納言は、いささかの真実を基にして大きな虚構を創作したのだ。物語文学の本質が、もし「真実を誇張して虚構を作りあげること」だとすると、中納言は無意識のうちに物語作者になっているのである。

(式部卿宮の)うちつけの御心には、「うべこそ、いとほひやかなるかたはかよひけれ」と思はずをかきしや。(四一七頁)

式部卿宮は、中納言と吉野姫が異母兄妹だという中納言の説明を信じた。中納言の創作した物語を、真実のものとして納得したのである。それだけ中納言の「物語」は、良い出来ばえだったので。

たとえ嘘だったとしても、説得力のある起源譚が提示されると、人間は納得し安心するのである。これは、神話・物語・宗教などの本質を示唆するものである。逆に言えば、私達が確実なものとして信じているものの「基盤」がいかに虚構に満ちたあやふやなものであるかが、ここには暗示されているのである。

中納言は、吉野姫を抱いて宮のもとを去った。

(中納言)「いかなる昔の契りにて、この御ゆかりにて我が心をくぐさまどふらん」とおぼしつづけて、……(四二〇頁)

しかし、祖型を創作する物語作者の立場にあった中納言(自らの物語を織りあげた中納言)も、真実の「祖型」は完全には見えていないのである。父親の転生した人物(唐の三の皇子)から話を聞いたり、唐后転生の夢を見たり、自分の寿命の短かさを観相されたり、吉野山の聖から吉野姫の人生を予言されたりして、うすうすは自分の「宿世」を察知してはいるものの、完全には悟り切っていないのである。だからこそ、中納言は苦しんでいる。中納言として(更には唐后として)、自分達の前世やそのまた前世のことは、何一つ知ってはいないのである。式部卿宮にとつての「祖型」は失われていたが、中納言にとつての「祖型」は断片(破片)としてごく一部分が残存している。

式部卿宮は、自分の好色の罪を悔いた。

宮も物ものたまひあへず、泣きにのみ泣き給ひて、「あまりなる心のす

さびにて、かかる目を見ると思へば、我が身ひとつの罪のがれやるかたなく」などのたまひて……(四一九頁)

しかし、すべては清水寺の観音の「方便」なのであった。唐后の転生である女兒を吉野姫の胎内に宿すための必要悪として、式部卿宮の「罪」はあった。式部卿宮(言わば素材)は、大きな運命(言わば話型)の中を無意識のうちに生かされている。誰かが(神か仏か、それとも『浜松』の作者かが)、式部卿宮を用いて不可思議な一編の「物語」を作りあげたのである。しかし、宮は、自分の人生が「物語」であることにまだ気づいてはいないのだ。

式部卿宮の「罪」についてもう一つだけ言及しておく、他人の妻と密通しつづける中納言の「罪」もまた同様に深いものがある。人間達の織りなす「罪模様」が、切実な物語を作りあげることになるのだ。

7・14 吉野姫の衰弱と、吉野山の聖の下山 中納言の目に、吉野姫はいたいたく映った。

かげのやうにあさましくやせほそり、その人と見えぬまでよわう、いみじながら、……(四二〇頁)

姫があまりに美しかったので、式部卿宮に領略され、男女関係を結ぶに到ったのである。そして、吉野山の聖が予言していた二十歳以前の交接による死を避けることができなかつた。姫の輝くばかりの美しさは、姫が「如意宝」であることを示しているのだが、それが幸福ではなく不幸をもたらしてしまったのだ。もしハッピー・エンドの昔話であれば、「姥皮」などのパターンになったと思われる。美しい姫君が観音から醜い老婆に変身する衣服をもらい、一定の年令に達するまで醜女を装いつづけて、理想の配偶者を発見した時に元の美女に戻る、などといったような粗筋である(「姥皮」如意宝)。『浜松』の吉野姫は、結婚(男女関係)を拒否すべき身でありながら、姥皮を持たなかつたので男女関係を拒みきれなかつたのだ。吉野姫は、結婚拒否を超越して結婚するのではなく、いきなり男女関係の渦中に投げ込まれてしまった。その結果、男女関係成立→男女関係拒否(死)という人生を辿ることになったのだ。その逆こそが、女性としては望まし

いというのに。

姫の死は、巻五の巻末まででは未然であるものの、話型的には必然である。吉野山の聖の予言は、確実に姫の人生を先取りしていたのだ。

中納言から吉野姫が重病を患っていることを聞いた吉野山の聖は、山を下りて京へ出てきた。

吉野の山の聖、この十年ばかり京へ出ることもなくとちこもりたるを、あながちにむかへ出で給ひて、かかる由をくはしうかたり給ふ。

(四二二頁)

吉野山の聖は、もし話がハッピー・エンドの方に発芽したならば、吉野姫の下山後に三年してから山を下りて上京し、姫と中納言を結婚させる、というものだったのかもしれない。聖者が、善男善女を結婚させるというのは、決して仏の道に背くことではない。

聖は、病床に臥す吉野姫を見て、その母親(吉野尼君)のことを回想する。

母君(尼君)のこの世、後の世も我をまたなく思し頼みて、この君(吉野姫)の御いのり、ねんごろにのたまひつけしかば、げにいとたいだいしき御身のほだしにこそはと、かの後生を導きたてまつらんがために、まづこのたづき(中納言)をいのり聞えし年ごろの心ざしなどを思ひつづけて、(聖は)いみじくたふとく法華経を誦じたまつり給ふ。

(四二二頁)

吉野尼君は、娘の吉野姫を絆として認識し、自分の往生の妨げをなす存在だと思ひ苦しんでいた。そして自分も長いこと、吉野姫の理想的な後見者の出現を尼君に代わって祈りつづけてきたのだった。その甲斐あって中納言が吉野山に出現し、尼君は吉野姫を彼に託して安心して往生を遂げたのだった。しかるに、吉野姫は今このような状況に立ち到ってしまった。

聖は、往生した吉野尼君が極楽にあって、この世の出来事を見ているだろうと思う。宇治十帖などにも、死者が「天がけりて」生者を見守っている、などという記述が存在している。そして、尼君が吉野姫に対する執着心をまた発生させるかもしれないと、危ぶむのである。聖は、尼君の極楽

での生活が永続できるように、娘への執着が湧きあがってきて人間世界に墮ちてくることがないように、心から祈って法華経を誦したのだった。

それにしても、吉野尼君は雲の上から事の成り行きを見て、本当に悲しんだのだろうか。式部卿宮(次期東宮)とつながりを発生させることで、吉野姫の産む女兒が将来幸福になる可能性がでてきた。中納言はまもなく早逝するだろうが、式部卿宮は東宮・天皇として栄華を極めることだろう。式部卿宮とつながっている方が、何かと安心なのである。吉野尼君が雲の上から見て吉野姫の運命を悲しんだ、とも断言できない側面があるのだ。

7・15 中納言と吉野姫の宿世 中納言は、吉野姫の苦悩を少しでもやわらげようと思つて、唐后の夢の次第を詳しく語つて聞かせた。

唐国の後の夢に見え給ひしさまなど、御ぐしをかきなでてかたりつくしはてて、(中納言)「さても思ひのほかなる御ありさまを見んと思ひ侍らざりに、

むすびける契りはことにありけるをこの世かの世とたのみけるかな」

(四二五頁)

吉野姫の現在が、きちんと説明できるものであることを、中納言は教えてやったのである。現在の苦しみは、吉野姫が異父姉である唐后と対面する大いなる喜びの序章なのだ。そう言つて中納言は、吉野姫を力づける。もつとも、中納言は聖の予言については全く言及しなかつたであろう。中納言が吉野姫に与えた「物語」も、真実そのものではなかつたのだ。彼は、式部卿宮や吉野姫に対して、さまざまな「物語」を作つてやっている。吉野姫の苦しみをやわらげるために唐后のことを口にした中納言は、その結果として唐后ゆえに発生した自分自身の苦悩を思い出し悲しむはめになつてしまう。むすびける契りはことにありけるをこの世かの世とたのみけるかな」という中納言の和歌は、『浜松』の主題を凝縮したものではなからうか。この歌の中には、契りのあやにくさが見事に封じ込められている。中納言は、この和歌を契機として、自分がこの世に絆を残してしまったことを痛感する。

もろこしまであくがれまかりし心なれども、(病床で私に)知られんと

おぼしける人（『吉野姫』もこそかばかり思ひすて侍る世のほだしな
りけれ。 （四二六頁）

自分が捨て果てたと思つていた世に、気づいてみたら多くの絆があった。吉野姫であり、吉野姫を愛するようになった契機としての唐后である。その唐后は吉野姫の胎内に転生してきて、生まれたあと中納言の新しい絆になつていくことであろう。もう少しあとの箇所では、尼姫の子のことを「ながき世のとまり」（四三四頁）と表現している。尼姫も、中納言の絆なのだ。そして、唐后の子、尼姫の子、大弐の娘の子など、中納言の死後に残される者の存在。中納言は、あと数年後には、愛する親や愛する女性達、そして愛する子供達を残して死なねばならぬ運命なのである。

自分の死期を悟っている中納言は、心の底から吉野姫の回復を願う。

（中納言）「まことにすこしもあはれと思す御心あらば、例ざまにとく
なりて見えさせ給へ。この月ごろ命にかふばかりにて思ひくだけ侍る
心も延べ侍らん」（四二七頁）

自分の生と吉野姫の死とを交換してもよい、とまで中納言は思っている（泰山府君の祭りと通底）。しかし、「いかなるにか、さはやぎやるべう
もあらず」（四二七頁）という吉野姫のありさまだった。中納言がそこまで
思いつめても、祈りは天に通じなかった。それが、中納言と吉野姫との間
の宿世なのだ。

7・16 吉野姫の懐妊、明らかとなる 式部卿宮の立坊（立太子）が、今
日か明日かに迫ってきた。その忙しい日々さなかに、式部卿宮は吉野姫
の見舞いに行ってきたのだ（四二七頁）。そして、姫に対する心残りを
振り切つて、帰つてゆくことになる。

（式部卿宮は）袖のうちにとどめおきて出でさせ給ひても、すこしか
かり所あり、あはれを知りげなりつる（吉野姫の）けしきありさまの、
身にしみて思し出でらるるに、ほかの事は忘れはてて、「なきにはえこ
そ」とぞおぼえける。 （四二九頁）

式部卿宮は、一体何を袖の中に残してきたのか。大系補注九三六によれ
ば、〈涙〉とも〈和歌〉ともさまざまに解釈されている。『浜松』の作者は、

男の女に対する愛や、女の男に対する感謝の気持ちなどを〈物質〉に結晶
させることをあえてしないのである。それは、力量の不足の結果なのでは
ない。あえて、そういう文学的伝統を拒否するのだ。そのために、今引用
した箇所のように文脈が不分明な文章を書くことになったのである。式部
卿宮と吉野姫の〈心〉が大切なのだ。それ以外、心を仮託する物質など全
く不必要なのである。袖の中には、男と女の〈悲しい心〉だけが残されて
いるのだ。

『浜松』の作者は〈心〉を信じ、〈物質〉を信じない。逆に言う、〈心〉
が信じられなくなった場合に、この物語は終了することになる。しかし、
中納言は、唐の三の皇子に転生したという父の夢や、吉野姫の腹に転生し
てくるという唐后の夢が、信じられる人間である。〈夢〉に、証拠があるわ
けではない。〈夢〉だけで十分なのだ。

さて、吉野姫懐妊の兆は、明らかに人々の目に見えるようになった。

九月ばかりよりただならざりける御心ちもいみじかりけるほどは、見
もわきたてまつらざりけるを、このごろいちじくる見たてまつり知り
て、…… （四三一頁）

中納言は、今さらながら吉野姫懐妊の意味を心に反芻して、「うれしくも
かなしくも」思うのだった（四三一頁）。唐后との再会をうれしく思い、吉
野姫との契りの薄さをかなしく思うのである。

現実世界は、二重性を帯びている。喜びの中に悲しみが宿り、悲しみの
中に喜びが宿る。それはまるで、唐の中に日本が重ねられ、日本にあつて
唐がしのばれることもと似ている（イメージの重層）。唐后の中に大姫（尼
姫）が見いだされ、尼姫の中に唐后の面影がしのばれることも似ている。
吉野姫にとつての式部卿宮との逢瀬は、悪夢であると同時に異父姉との再
会でもあった。中納言にとつては、愛する女性を他の男性に盗まれ密通さ
れることが、愛する唐后との再会でもあったのである。

悟りがひらけていさえすれば（二相を悟ることができさえすれば）、この
世が即ち浄土なのもある。どんなに悲惨な現実であつたとしても、当事
者である人物の〈心〉次第でどのような意味の組み換えが可能なのだ。

面白いことに、〈心〉を証明する客観的な物質は存在しない。その信じがたい〈心〉を信ずることによって、平板な現実世界は立体化し両義性を獲得してゆくことになる。このような『浜松』の世界観は、確かに『源氏物語』を一步先へ押し進めている、と言ってよいのではあるまいか。光源氏も薫も、中納言のような心境には到達できなかったのではなからうか。

7・17 中納言、吉野姫を自邸(本邸)に移す 中納言は、吉野姫が故式部卿宮(中納言の実父)の娘だという説明を、母君にもおこなった。そして、今は何も隠すことはないと思つて、吉野姫を自邸(父親から相続した邸)に移したのだ(四三四頁)。

中納言邸には、尼姫と吉野姫との二人の美女が並立することになった。
(尼姫と吉野姫が)ただひとつ物にかかやきあひたる心ちして、あさましくめでたき御かたちどもを、…… (四三五頁)

と、二人の女性が甲乙つけがたいことが語られている。二つの玉の話型であり、中納言がその所有者である。しかし、そのどちらとも実事を中納言は持ちえない。ある程度の理想性とある程度の限界性が、中納言には指摘できよう。あるいは、中納言においては、理想性と限界性が日本と唐の関係のようにオーバーラップされている、と言った方がよいかもしれない。二つのものは、決して矛盾するものではない。『浜松』では、相異なるものが不思議な脈絡で重ね合わせられているのである。

ところで、中納言と尼姫は赤の他人であつたのが、母の再婚によって義理の兄妹関係が発生したものである。その上に、恋愛関係が発生してきた。一方の中納言と吉野姫はほとんど恋愛関係にあるのだが、世間的には異母兄妹を装っている。何となく、似ているのだ。家族の肉親の絆と男女の絆は、重層的に存在するのである。

さて、二つの玉を所有した中納言は、今自分の手許にはないもう一つの玉を追慕する。

唐国の后は又かかる御光にはあらず、似る物なく、際はなれていみじうめでたかりしぞ思ひ出で聞ゆれば、よろづの事さまじに、かなしき涙のものよほしなるや。
(四三五頁)

唐后は、中納言にとつて〈三つ目の玉〉なのではない。尼姫と吉野姫の二つの玉の上に立ち、較べるものない〈たぐいなき一つの玉〉なのである。尼姫も吉野姫も、中納言の唐后への思いを慰めるよすがなのである。唐后への中納言の愛は、そもそも中納言と大姫(尼姫)の愛を祖型とし、それを唐において反復したものであつた。ところが、ここでは中納言と唐后の愛の方が祖型に昇格しており、その反復(祖型への憧れを慰める手段)として中納言と尼姫との愛があつたことになっている。

中納言は、遠い過去から転生を繰り返して現在に到っている。最初の生(祖型)を無限に反復することで、輪廻転生しているのだ。しかし、そのことはそれぞれの世における生が過去(前世)の単なる反復だつたということの意味するものではないのである。それぞれの〈現世〉は、それぞれを抱かせることで、それぞれの〈後世〉にとつての祖型へと昇格していったのである。中納言は、この世でたった一回きりの人生を生きた(最初の一回目を始原的に生きた)、とさえ言つてもよいかもしれない。輪廻を繰り返すことと、それぞれの生が意味を持つこととは、決して矛盾しないのである。〈反復〉が〈祖型〉へと転じていく点に、ポイントがあるわけだ。

7・18 転生の二つの姿 『浜松』は輪廻転生を主たるモチーフとする作品だが、それは一人の主人公の転生(前世、現世、来世)を描きつづけるものではなかつた。そこが、三島由紀夫の『豊饒の海』と違うところである。『豊饒の海』では一人の主人公が、全く違う人生を何回も繰り返して生きてゆくのだが、『浜松』は、人々がすべての世でほとんど同じような愛と苦しみを経験するという世界観に立脚している。だから、中納言の人生は一回書けばそれで十分なのだ。まもなく中納言は死去する。死去したあと更なる転生をすることになるのだが、『浜松』の作者はそれを具体的に書きつづける意志は全くないのである。読者に予想だけさせて、「あとは書いても書かなくても同じことですよ。現世と同じです」とでも言い捨てて、さつさと擱筆するのである。『浜松』は、急速に終末部を迎えつつある。

さて、物語に、

たねなき思ひはかなふわざにこそありけれ。(四三六頁)

という諺が引用されている。尼姫の満足した心境を象る表現なのではあるが、尼姫の意識を越えて含蓄のある諺である。「種なき思ひは成就する」ということを逆に言う、「種ある思ひ(執着のある思ひ)は成就しない」のだ。ここには、人間的情愛(絆)ゆえに、転生を繰り返しながら悟りを開くことのできない『浜松』の人々の姿が封じ込められているかのようだ。

転生にも、二種類があるのだ。

あふには身をもかふるこそ世のためしなれば、……(四三六頁)

とあるのは、愛人(恋人)と再会するために人間世界の中で転生すること。そして、

我が身をかへて極楽などにまうでたらん人の心ちする身(四三七頁)

とあるのは、往生するための転生、輪廻を断絶するための最後の転生の意である。

二種類の転生のうち、後者(往生)に属するのは吉野尼君のみである。

唐后も一旦は天上に転生したので後者に入りかかったのだが、最後のところで人間世界に再度転生することになったので前者の方に入ってしまった。

宗教は後者を重視し、文学は前者を凝視する。宗教的な未熟さは、人間的な誠実さなのである。誠実さとは、弱さと同義語である。そこに、宗教と文学の大きな違いが指摘できよう。

7・19 吉野姫の死、近づく そうこうするうちに、吉野姫の病勢はつり、それを看病する中納言も不安が増大してゆく。吉野山の聖の予言が確実なものとして、中納言に認識されたのである(四三八頁)。

中納言は、もともと夢や予言を信ずることのできる人物であった。(聖の予言)も、確実なものとして頭初から考えていたことであろう。それが本当に百パーセント正しいということを、中納言は今心の底からかみしめているのである。つまり、中納言をめぐるさまざまの予言(中納言の死、唐后の転生)も絶対に正しいということなのだ。

なお、現東宮(かつての式部卿宮)が吉野姫を心配する場面で、

日に千たび御使ひ、ゆきかへるさまなど雨の脚たよりもしげく……(四三九頁)

とあるのは、桐壺更衣を心配する桐壺帝のようすと少し似ている。吉野姫に対する東宮の執着を強調するためであろう。

7・20 唐の状況が中納言に伝えられる その年は日中の往還が盛んであって、中国から日本に渡って来た人を介して、彼の国の状況が中納言のもとにもたらされた(四三九〜四四〇頁)。

唐后は死去し、唐帝は悲しみのあまり出家して入山したという。かつて見た(夢)が本当に真実であったと、中納言に判明する。彼女の転生も、中納言の死も一つずつ実現してゆくことだろう。

三の皇子は、東宮に立った。彼がやがて即位することも、確かであろう。彼は前世の功德ゆえに、大唐帝国の帝位に即くことができる。その一方で、多くの后達と関係を持ちたくさんの子供を作ること、又してもこの世に對して(絆)を残してしまうことだろう。三の皇子は、来世でも極楽往生できそうにない。

一の大臣の五の君は、后になることを拒否して出家したという。彼女の詠んだ、

この世にもあらぬ人こそこひしけれ玉のかんざしなにかはせん(四四〇頁)

というのが、『浜松』の最後の和歌である。彼女は出家を遂げたが、中納言と再会したいという願望(執着)を強く抱いている。このままでは、とても往生することはできない。まもなく中納言は死去するが、唐土に転生して五の君と対面することになるのではなからうか。もし五の君の寿命がないならば、彼女もまた日本に転生してくることになるのかもしれない。中納言のかつての渡唐は、三の皇子(中納言の実父の転生)の妄執(子と再会したい親心)を晴らす一方で、唐后や五の君などに新たな執着を作らせることになってしまったのである。

「見し夢は、かうにこそ」と(中納言が)おぼし合はするにも、いとどかきくらし、たましひ消ゆる心ちして、涙にうきしづみ給ひけり。

(四四〇頁)

この「夢」は、唐后が吉野姫を母として転生してくと告げた夢を指している。しかし、これまで中納言が見てきた夢をすべて含めているようにも思えるのである。唐后の死と転生、中納言の死と転生を読者に強く想起させて、『浜松』は、終了したのだった。

『浜松』は、巻五までしか現存していない。巻六は、成立時に存在していたのだろうか。あってもおかしくはない、とは思う。中納言の死までは、できれば書いてほしかった。6・21に書いたように、〈中納言の死〉が物語の区切りとなるからである。けれども、巻五の終了時点で、中納言の死はほとんど確実になっている。唐后の転生、吉野姫の死、中納言の死と、たてつけに重要な出来事が展開してゆくことは動かすことのできない事実である。『源氏物語』で光源氏の死が実際には書かれなかったように、『浜松』でもそのような省略の技法が用いられたのではあるまいか。『浜松』は、巻五で終了していたと考えることにしようではないか。

8 おわりに

詳しくすぎるほど細かく、『浜松』の世界を分析してきた。これ以上、何を付け足すことがあるだろうか。私達は、唐后と中納言に（最大の美質を有する一対の美男と美女に）、極楽への往生を遂に許さなかった『浜松』作者の執着心を思いやるべきだろう。この作品には、人間的恋愛への暗い凝視がある。男と女の恋愛だけではない。父と子、母と娘の親子間の恋愛も、消えることのない〈絆〉なのである。

唐后と中納言は、いまだに転生を繰り返していることであろう。二十世紀末の都会の片隅で、悲劇的恋愛の炎を燃えあがらせているかもしれないのである。『浜松』という架空の物語は、今や現実を生きる人間達（恋人達、親と子）の〈祖型〉へと昇格しているかもしれないのである。

本稿の意図は、私という読者の中における『浜松』像の変容をもたらすことでもあった。『浜松』は、私に読まれることによって、〈祖型〉が〈反復〉されたのである。そして私は、『浜松』の表現を読むことで、作者の創

作体験を〈反復〉しながら、作者の表現しなかったそもその根源（祖型）を探究したのである。作品を読むとは、作品を忠実に現代語訳するということではなからう。それは、単なる〈反復〉である。作品を成立させた真実の基盤を（祖型を）探し求めねばならないのではなからうか。中納言が自分の〈前世〉をあれこれ詮索していたように、私も『浜松』の表現を産み出した根源をあれこれ夢想していたのである。人間にとつての前世捏造が物語創作と等しかったように、私も『浜松』を素材としながら『原浜松』という別の物語を創作していたのかもしれない。研究は、ある意味で創作ですらあるのではないか。

(一九八八・一一・二五)

平成元年1月18日受理
人文社会科学系列 文学研究室

My Reading of "*Hamamatsu-Chūnagon-Monogatari*"
(Part II)

— from Vol. 4 to Vol. 5 —

Keiji SHIMAUCHI

Abstract

This paper only tries to read "*Hamamatsu-Chūnagon-Monogatari*". Through intensive reading I try to find tale-types, structures, and motives. "Reading between (under) the lines" is my method of study.